

主役は江美里OH！

作
福本ふう之介

紅洲（べにす）町の住人

江美里 火消し伊安吾の妻 30代女性
伊安吾 火消し「お組」小頭 30代男性

尾瀬朗 火消し「お組」頭 40代男性
尾瀬朗の妻 番匠の娘 20代前半若い女性

勝司 火消し「お組」平人足 若旦那キャラ 20代男性
権助 火消し「お組」平人足 相撲取り 20代男性
与太郎 火消し「お組」平人足 少し間が抜けている 20代男性

お花 勝司の母 4～50代女性
鶴子 権助の母 4～50代女性
お寅 与太郎の母 4～50代女性

番匠 桃菜の父 大店の主人 5～60代男性
江麗尼 番匠の妻 4～50代女性
竹庵 番匠の弟 藪医者 4～50代男性
梨花 竹庵の妻 4～50代女性
薪司郎 大家さん 番匠の親戚 4～50代男性
ぱー子 薪司郎の妻 年齢不詳女性

あつの 占い師 年齢不詳女性

上大岡越前 奉行 30代男性

木風呂洲（きぷろす）町の住人

紋太 木風呂洲屋主人 木風呂洲の町役 4～50代男性
お満 紋太の妻 4～50代女性

桜 木風呂洲屋店員

梅 木風呂洲屋店員

椿 木風呂洲屋店員

牡丹 木風呂洲屋店員

お七 最初の火事で助けられた 元八百屋の娘 20代女性

その他の住人

辰五郎 火消し「め組」頭 4～50代男性

長五郎 ばくち打ち 4～50代男性

ジローラモ イタリアからの特使 年齢不詳男性
タローラモ ジローラモの弟 年齢不詳男性

◎一幕一場

木風呂須町

宿場「木風呂須屋」店先にたくさんの人が並んでいる

タローラモ 「兄さん大きな火事だったね」

ジローラモ 「そうだねえ、大きな火事だったね」

タローラモ 「でも町火消しの「お組」の大活躍であつという間に消し止められたね」

ジローラモ 「何事もなかったかのように町には平和が訪れているね」

タローラモ 「それにしても木風呂洲屋はお客さんがいっぱいだね」

ジローラモ 「きれいなご婦人もいるのに、俺たちは何で縁台でボードゲームをしているんだらうね」

タローラモ 「ここはイタリアじゃないからね」

ジローラモ 「それにしてもこのゲームは面白いね」

タローラモ 「この間、江戸の佃島に行って教わってきたんだ」

ジローラモ 「白と黒の碁の駒を使って遊ぶだけなのに、奥が深いね」

タローラモ 「僕が白、兄さんが黒。交互に駒を置いていく。挟まれたらその駒を自分の色と置き換える」

ジローラモ 「佃島発祥の挟み囲碁は本当に面白いね」

タローラモ 「兄さん今日も木風呂須町は平和だねえ」

ジローラモ 「ずっとこのまま平和だといいいねえ」

お花・鶴子・お寅がお茶を飲みながら話している

お花 「きいた？この辺り、木風呂洲を仕切っている火消しの頭お亡くなりになったそうよ」

鶴子 「え？「へ組」の頭がかい？芋屋の大将かい？」

お寅 「芋屋で「へ組」って、あんまり笑っちゃいけないねえ」

お花 「それで「へ組」はどうなるんだい？」

鶴子 「木風呂洲の火消しはどうなるんだろうねえ？」

伊安吾・勝司話しながら店に入ってくる

伊安吾 「おい勝司、何がいけなかったんだ？俺」

勝司 「伊安吾の兄貴は何も下手打ちじゃないですよ、ちょっと火事の規模が大きかっただけでざんすよ」

伊安吾 「尾瀬朗の頭がいなかったらと思うとぞっとするぜ」

勝司 「あの人は特別ざんす、伝説の火消しですから」

伊安吾 「俺もよいつかあの人みたいになりてえんだけどよ、まだまだ修行が足りねえな」

お花 「あ！うちの馬鹿息子だ！勝司！」

勝司 「おお！おっかあ！」

鶴子 「伊安吾さんも一緒だ、昨日の火事はご苦労様だったね」

伊安吾 「紅洲のご婦人おそろいですね？」

お寅 「聞いたかい？「へ組」の頭亡くなったって」

勝司 「情報が早いな、そんなに生き急いでどうするんだい」

お花 「うるさいよ」

勝司 「どうやら、お組の尾瀬朗親分が仕切るって噂でやんすよ」

鶴子 「じゃあ「お組」はどうなるんだい？」

勝司 「決まってるじゃないですか、伊安吾の兄貴が「お組」の頭になって「へ組」は尾瀬朗親分が頭になって、これで紅洲も木風呂洲も平和になるってことでやんすよ」

お寅 「そいつはよかった」

勝司 「それはさておきおっかさんよ」

お花 「なんだい？」

勝司 「ちよつと金貸してくれないか」

鶴子 「勝つあん、およしよ博打かい？」

お花 「そうじゃないんだよ、中に遊びに行くんだよ、この馬鹿息子！またあの太夫のところかい？」た、また遊郭に行くんだろ。またあの太夫のところかい？」

勝司 「いいじゃないか、おつかさんだって早く孫の顔が見たいだろ？太夫があっしにほの字でさ、年期が明けたら一緒になるって約束しているんだ」

お花 「いいかい？花魁はなんでおいらんっていうか知ってるかい？キツネはしっぽがあるだろ？花魁はキツネより化かすのが上手なんだよ。尾っぽがいらぬ、だからおいらんっていうんだよ。化かされないようにしなさいよ」

勝司 「何言ってるんだ、太夫はあっしに惚れてるんだよ？」

お花 「半鐘が鳴ったらすぐに帰ってくるんだよ」

勝司 「わかってますよ！今夜は帰らないでや・ん・す」

お花 「みつともないこと見せちゃったね」

伊安吾 「勝司！おつかさんにあんまり心配かけるんじゃないやねえぞ」

鶴子 「博打っていえばさ！長五郎さんっていただろ？」

伊安吾 「ああ知ってますぜ！あんまり大きな声じゃ言えませんが丁半博打で相当勝ったみたいですよ」

木風呂洲の店員が話をしてる

桜 「ねえねえお客さんで長五郎さんっていたじゃない？」

梅 「ばくち打ちの長五郎さんかい？」

椿 「なんかすぐ儲かったって行ってたわよね」

牡丹 「最近見ないわよね、儲かったからもっといいお店言ってるのかしら」

桜 「それが死んじゃったらしいのよ」

梅 「ええ？本当に？」

桜 「でね、ここからがちょっと怖い話なんだけどね」

椿 「ええ？なにになに？」

桜 「長五郎さんが儲けたお金が部屋に全く無かったんだって」

牡丹 「使っちゃったんじゃないの？」

梅 「でも長五郎さんって…」

桜 「そう！けちで有名だったじゃない？だから使ってないはずなのに」

牡丹 「泥棒にでも入られたんじゃないの」

桜 「それがね：部屋から出てこないのをお隣さんが気づいて部屋に入ろうとしたんだけど、嚴重に鍵がかかってたんだって」

椿 「あの世に持ってっちゃったのかしらね？」

隅で茶を飲んでいたあつの、おもむろに占いを始める

あつの 「うむ、見えるぞ！見えるぞ！」

梅 「あつのさんの占いが始まった」

皆集まる

あつの 「へっついじゃ、へっついが見えるぞ」

梅 「へっつい？」

お寅 「火鉢みたいなものよ」

あつの 「見える！へっついじゃ！」

桜 「そのへっついと長五郎さんの事関係あるんですか？」

あつの 「へっついじゃ！そのへっついが来る！皆のもの気をつけるのじゃ…ぐあああああああ」

お寅 「あつのさん！あつのさん！」

あつの 「こんなでましたけど（かわいい声）」

紋太とお満へっついを持って入ってくる

紋太 「もっとケツ持ち上げろ！重いから！力入れろよ」

お満 「こっちはか弱い女の子だよ」

紋太 「か弱いが聞いてあきれるわ！もっとケツ持ち上げろ！そうじゃないお前の尻持ち上げてどうするんだよ。へっついのケツだよ」

桜 「お帰りなさいませ」

お満 「ああ重かった、桜ちゃんシップ持ってきてくれるかい」

紋太 「寒い寒いっていうからよ、古道具屋で安くへつつい売ってたから買って来た」

お寅 「あつのさん！へつついが来るってこういうことだったのかい？」

あつの 「え？なんのこと？あつのわかんない」

鶴子 「あつのさんの占いは神様を憑依させるのよ、だから今のあつのさんに言ってもわかんないなの

よ

紋太 「今日は番匠さんがくるって言うからよ、あんまり寒い店じゃ恥ずかしいからよ」

お満 「番匠さんっていえばこの辺りじゃ有名な大店の主人だろ？この人負けちゃいられないって」

あつの 「番匠さんが何をしてくるんだい」

牡丹 「占ったらわかるじゃんね？」

椿 「しー！」

あつの 「占いには体力を使うんじゃない！聞いてわかるようなことに無駄な体力使わんのじゃ！あらやだ、言葉使いが悪くなっちゃった、てへぺろ」

伊安吾 「尾瀬朗親分の婚礼の打ち合わせですよね」

桜 「番匠先生と尾瀬朗親分が？打ち合わせ？もしかして桃菜ちゃんですか」

伊安吾 「ついにうちの親分も妻を娶るんだよ」

桜 「でも桃菜ちゃんですか？」

伊安吾 「なにがいてえんだ？」

桜 「だって…ねえ？」

伊安吾 「うちの親分じゃ釣りあわねえっていいたいのかい？」

桜 「あ…いや」

伊安吾 「いやここだけの話、俺もそう思うよ。あんな中年親父がなんであんなお美しい桃菜さんと結婚するだなんて」

梅 「伊安吾さんも若い方がいいんですか？」

伊安吾 「そりゃ決まってるだろ、昔から言うじゃねえか豊と女房は新しい方がいいって」

江美里入ってくる

江美里 「何だってお前さん？女房と畳は何だって？」

伊安吾 「ああああ：畳は新しい方が良いけど、女房は古い方が良いねえ」

江美里 「悪かったわね、古い女房で」

伊安吾 「そうじゃねえんだよ、勘弁しておくれよ」

江美里 「すごい汗！はい手ぬぐい」

伊安吾 「すまねえ、お？この手ぬぐい」

お寅 「あらやだ！見せ付けてくれるわね。その手ぬぐい伊安吾さんが江美里さんに送ったやつだろ」

桜 「えー！そういうの素敵！ずっと持ってらっしゃるんですか？」

江美里 「物持ちが良いだけだよ」

お花 「うちの旦那がまだ生きてたところに染めたやつだったね」

伊安吾 「心臓を意味する、南蛮ではハートって言うんですよね、ハートが染めてある手ぬぐい」

桜 「羨ましいなあ！そういうのあこがれちゃう」

与太郎 「孝行糖！孝行糖！」

江美里 「あら！与太郎さんこんにちは」

与太郎 「江美里姐さんおはようさんでござんす」

江美里 「今日から初仕事だね。いいかい商売は上見てやるんだよ」

与太郎 「わかってますよ！（上を見てぼーっと口を開けている）」

江美里 「上見てやるってのはそういうことじゃないよ。仕入れたらそこに幾分か利益を乗せて商売する

んだ。上を見ろってのはそういう意味」

お花 「面白いねえ与太郎さんは」

お寅 「面白くないわよ、身内の身としては」

与太郎 「おつかあ！久しぶりじゃねえか」

お寅 「朝あつたじゃないか」

与太郎 「じゃあ朝ぶりだ！会いたかったよ、おつかさん。久しぶりの再会だ、飴買っておくれよ」

お寅 「親に売ってどうするんだい」

与太郎 「この飴、一両でどうだい」

お寅 「高いよ」

与太郎 「商売は上を見てやらなきゃならねんだ」

お寅 「上を見すぎだよ、こんなところで油売ってないで行つといで」

与太郎 「じゃあいつてくらあ」

お寅 「日が暮れる前には帰ってくるんだよ」

与太郎 「へーい！孝行糖！孝行糖！」

お寅 「すまないねえ、江美里さん！おかげさまであの子も商売始められるようになって。ずっと家にいるごくつぶしに飴屋やらせるなんて発想、思いもつかなかったよ」

お花 「家にずっといるってことは、この与太郎は親孝行な息子なんですってお上に伝えたのは、お江美

さんだったわよね」

江美里 「だって実際に親孝行のいい息子さんじゃない」

お寅 「そしたら何の間違いか、お上から表彰されてね」

お花 「お上のお墨付きの孝行息子の売る飴！孝行糖って名前にして売れば商売になるよってね」

江美里 「おせっかいだと思ってるんだけどね、つつい口挟んじゃって」

お寅 「何言ってるんだい、みんな江美里さんが世話焼いてくれてありがたいと思ってるんだよ」

お花 「本当よ、紅須町のみんなそう思ってるよ、そういえば鶴子さんのところの権助さん帰ってきたんだっ

て？」

鶴子 「そうなのよ、上方で相撲の出稽古に行ってたんだけどね」

あつの 「権助さん相撲取りなのよ」

椿 「そうなんですか？かっこいい」

鶴子 「修行で見違えるほど大きくなって帰ってきたのよ」

江美里 「そうなんですか？」

鶴子 「今帰ったぞっていうから、玄関を開けて飛び出したら大きな柱に当たったの、よく見たら息子のむこうずねだったのよ」

お寅 「随分大きくなったわね」

鶴子 「頭は一升樽のようで目玉は炭団くらいあるのよびっくりしちゃった」

お花 「修行の成果ね」

権助 「おつかさん！おつかさん！」

鶴子 「あら！」

権助 「しーっ！こっち来い！」

鶴子 「ちよつと失礼」

権助 「おつかさん大げさだよ、そんな風に言われたら出ずらいでござす」

鶴子 「いいじゃないか！自慢の息子だよ」

権助 「卑下も自慢って言うでごわす」

鶴子 「髭なんて生えてないじゃないか」

権助 「上方からの帰り道で三島の宿でな、日本一の富士山を見て女中さんに、日本一の富士山を朝夕見れて果報者ですなって言ったらな。女中さんがああ見えて半分は雪ですって言ったんだよ。それを聞いて余計富士山が大きく見えたよ」

鶴子 「つまり謙遜して言えって事だね」

権助 「そうでごわす、皆さんにご挨拶しに行きたいから入りやすい雰囲気にするでごわす」

鶴子 「うちの息子修行で見違えるほど小さく小さくなって帰ってきました」

江美里 「そうなんですか？」

鶴子 「今帰ったぞって蚊の泣くような声が聞こえるから外に出たら、踏み潰しちやった」

お寅 「踏み潰す？随分小さいわね」

鶴子 「頭は崎陽軒のシュウマイほどの一口サイズで目玉はグリーンピースくらいで1個じゃ足りない大き

さよ
」

お花 「さっきといってることが違う」

権助 「おっかさん！」

伊安吾 「おお！関取！なんだい！やっぱり大きくなったなあ」

鶴子 「朝夕見るとそれほどのものじゃないですよ、ああ見えて半分は雪ですから」

権助 「おっかさん！」

伊安吾 「関取！しばらくはこっちにいるんだろ？火消し手伝ってくれよ」

権助 「もちろんでござす。久しぶりの江戸でござす、芝居見物にでも行ってくるでござす」

鶴子 「日が暮れるまでには帰って来るんだよ」

伊安吾 「それで？番匠先生呼びにいったんじゃないのかい？」

江美里 「もうすぐ来るはずなんだけど」

尾瀬朗 「邪魔するぜ！」

伊安吾 「頭！」

尾瀬朗 「伊安吾！悪いな！待たせちまって。江美里さんも、紅洲の皆さんもお揃いで。紋太兄貴世話になります」

紋太 「この度はご婚礼の打ち合わせに使っていただきありがとうございます、今へっついに火を入れますんで！温まっていってください」

尾瀬朗 「何から何まですまねえな」

お満 「桃菜さんは？」

桃菜 「おせびっぴ歩くのはーやーいー」

桜 「おせびっぴ？」

尾瀬朗 「やーめーろーよーみんな見てるだろ（でれでれ）」

桃菜 「あ！皆さん始めまして！おせびっぴの奥さんになります桃ぼよです」

紋太 「桃菜お嬢さん、外は寒かったですよ、へっついにあたって下さい」

桃菜 「えー桃ぼよぜんぜん寒くないしー、おせびつぴと一緒だと」

梅 「大丈夫かな？頭」

番匠一家登場

番匠 「およしなさい桃菜！皆さんの前だろ」

尾瀬朗 「お父上！」

江麗尼 「良いじゃありませんか、ねえ桃菜！仲良きことはいいことよ」

竹庵 「今日は冷えますな、こんな日は風邪を引くものが増えて医者は大もうけですな」

梨花 「病人が増えてもうちは儲かりませんよ、藪医者って評判なんですから」

竹庵 「自分で言っちゃいかんだろ」

梨花 「竹庵先生に見せると余計病気が悪化するって評判ですよ」

桜 「番匠先生！いらっしやいませ」

梅 「番匠先生って紅須町の名医で有名な番匠先生？」

牡丹 「そうそう！その隣はやぶ医者で有名な竹庵先生。兄弟なのに兄は名医、弟はやぶ医者で有名な藪井一族の皆さんよ」

椿 「その横にいる手ぬぐいをくるくるしてる人は誰？」

卷司郎 「あのね、ここに縦じまの手ぬぐいがあるでしょ？これが一・二・三！横じまの手ぬぐいになっちゃうのね。おかしいな群馬の温泉宿でこのネタやった時にはウケたのになあ」

パー子 「ハッハー！面白い！面白い！あなた最高に面白い！」

牡丹 「お金持ちの一族にはちよつと変わり者がいるのよ」

椿 「なるほど」

番匠 「尾瀬朗さん、早速だがね。ふつつかな娘だけどよろしく頼むよ」

尾瀬朗 「謹んでお受けいたします」

紋太 「さあ！今日は祝いの宴ですな！」

太郎手負いで入ってくる

与太郎 「いてててて」

お寅 「与太郎どうしたんだい」

与太郎 「め組の奴らにやられた」

お花 「め組だつて？」

江美里 「与太郎さんが何したつていうんだい」

与太郎 「孝行糖！孝行糖！」

辰五郎 「うるせえぞこの野郎」

与太郎 「孝行糖はおいしいよつと」

辰五郎 「てめえ紅須のお組の与太郎じゃねえか。木風呂須で商売するならめ組にあいさつの一つもないの

か？」

与太郎 「あーあー…こんにちは」

辰五郎 「てめえなめてるのか（棒で殴る）」

与太郎 「いてえ、いてえ」

徳三郎 「辰五郎兄貴、そのくらいで勘弁してもらえないですか」

与太郎 「おお！お前！誰だっけ」

徳三郎 「ここで俺に会ったこと誰にも言うんじゃないぞ」

与太郎 「てなことがあったんです」

パー子 「言っちゃってる！面白い面白い！」

お寅 「ひどいことしやがる。与太郎どこぶたれたんだい？」

与太郎 「こーこーと！こーこーと！（孝行糖）」

伽羅 「面白い！面白い」

卷司郎 「面白がつてる場合じゃないでしょ」

竹庵 「じゃあ私が診ましよう」

お寅 「やめてください、竹庵先生に見てもらったら、ただの打撲も致命傷になります」

権助 手負いで入ってくる

権助 「め組にやられた」

お花 「権助さんもかい？」

権助 「見ず知らずの奴が止めに入ってくれて助かったでござす」

辰五郎 「おいおい紋太の親分、随分ともうかつてるじゃないか」

紋太 「てめえ！め組の辰五郎じゃねえか」

お満 「今忙しいんだ帰っておくれ」

辰五郎 「みかじめ払ってもらおうか」

紋太 「この間払ったばっかじゃねえか、次はまた来月だろ」

辰五郎 「こんだけ急に儲かってるんだ、独り占めはないんじゃないのか？」

紋太 「お満！塩まいとけ」

辰五郎 「この野郎」

紋太 「与太郎さんや権助さんと違って、俺はちよつと骨があるぜ。やってやろうじゃねえか」

辰五郎 「随分威勢がいいじゃねえか。殴ってみろや、その代わりにめ組総出でお礼しに来ますよ」

紋太 「いくらほしいんだ」

お満 「ちよいとあんた」

辰五郎 「わかってもらえればいいんですよ。ちよいと山分けですよ仲よくやりましょうや。そういえ

ば木風呂洲の「へ組」の頭亡くなったんですって？「お組」が仕切るんですってね？こちらも仲良くやりましょうや。尾瀬朗親分独り占めはずるいや、桃菜お嬢さんに木風呂洲まで独り占めはよくないや」

尾瀬朗 「てめえ、誰に口きいてやがる？」

半鐘鳴る

江美里 「半鐘！火事だ！ちよいとお前さん火事だよ」

お花 「近いみたい！」

伊安吾 「権助！いけるか？」

権助 「いててて、何とか…」

伊安吾 「与太郎！いけるか？」

与太郎 「いてえよいてえよ」

尾瀬朗 「辰五郎の兄貴、お組の連中はあいにく手負いです」

辰五郎 「め組が力貸しましょうか」

尾瀬朗 「伊安吾！どうする」

伊安吾 「こんな火事俺一人でも消してみせますよ」

尾瀬朗 「め組の頭、ここは力貸してもらえないでしょうか」

伊安吾 「頭！」

尾瀬朗 「お願いします」

辰五郎 「合点！頭つてのはこうでなくちゃな」

尾瀬朗 「その代わり、二人のことは後できっちり落とし前つけてもらいますよ」

辰五郎 「お…おう、いやこいつらはよ筋が通らないことしやがったから…」

尾瀬朗 「話は後だ！め組のお手並み拝見と行きましようか」

辰五郎 「お…おうよろしく頼むぜ」

尾瀬朗 「番匠さんすみません、ちょっと中座させてもらいます。絶対に桃菜のことは幸せにしてみせます

んで」

男たち出て行く

紋太 「騒がしくてすみません、桃菜さん火消しの嫁になるってことは毎日こういうことが起きるって事

です。大丈夫ですか？」

桃菜 「……」

お満 「桃菜お嬢さん？」

桃菜 「超格好いいんですけどおせびっぴー！」

紋太 「心配いらなそうすな」

番匠 「いい目をしてるなああの男」

紋太 「ええ男がほれる男ですよ」

番匠 「最初桃菜がやつと結婚した言っけ言っけ出したときは正直信じられなかった、なぜ手塩にかけた娘をあんな中年男に取られるんだってね。でもわかるような気がするよ」

江麗尼 「ちよっとお前さん、寒かろう、へっついに当たらせてもらおう」

チャリンと金の音

番匠 「熱っ、へっついかから火が飛んできたよ」

竹庵

「大丈夫かい？あたしが診ましようか」

梨花

「およしよ、ただの火傷が致命傷になる」

番匠

「うっ、何だこれは…頭が頭が」

江麗尼

「ちよつとお前さん！家で休みましよう」

1幕終わり

◎二幕一場

お白州の前

タローラモ

「兄さん、この間の火事は随分と大きな火事だったね」

ジローラモ

「大きな火事だったね」

タローラモ

「伝説の火消し尾瀬朗が大活躍だったね」

ジローラモ

「め組もいたみたいだけど手出しする隙が無かったそうだよ」

タローラモ

「やっぱり火消しはお組だね、伊安吾も大活躍だったみたいだね」

ジローラモ

「いつかは頭になる器の男らしいよ伊安吾は」

タローラモ

「それにしても、この佃島発祥の合わせ囲碁は本当に面白いねえ」

ジローラモ

「白と黒の駒で挟まれたら自分の色の駒に入れ替える。簡単なルールなのにねえ」

タローラモ

「ルールは一瞬、遊びは一生だね」

ジローラモ 「うまいことをいうねえ」

タローラモ 「イタリアから来た俺たちみたいなプレイボーイでも、女口説くことを忘れて熱中しちゃうね」

ジローラモ 「でもちよつと面倒くさいね」

タローラモ 「囲碁の板だとマス目が多いから、なかなか決着がつかないねえ」

ジローラモ 「少し改良してみようか」

タローラモ 「それはとってもいいアイデアだ」

ジローラモ 「今日も平和だねえ」

タローラモ 「ずっとこの平和が続くといいのにねえ」

声 「南町奉行、上大岡越前守様のおなーらー」

上大岡 「そうそう、ぶうーっっておい！ちゃんとやりなさい」

声 「南町奉行、上大岡越前守様のおなーりー」

壮大なBGMに消されて何を言ってるかわからない

上大岡 「皆の者そろっておるか？ただいまよりお白州を開く。ちよっと音響さん音がでかい！もうち

よい小さく！一同の者揃いよるか？」

伊安吾 「すみません番匠殿がまだにございます」

江麗尼 「ちよいとお前さん！まだ頭が痛むんだろ？無理しちゃいけないって言ってるだろ」

上大岡 「おお番匠殿のご一家までいらしておる。一同そろったな。」

上大岡 「その前にすまぬが私から。この尾瀬朗という男、聞くに伝説の火消しだとのこと。相違ないな」

伊安吾 「この度の火事も尾瀬朗さんがいなかったらどうなっていたか」

上大岡 「なるほど、尾瀬朗相違ないな」

尾瀬朗 「伝説かどうかは自分じゃわかりませんが、あつしに消せない火はねえってことは間違い御座

「いません」

上大岡 「そこでだ尾瀬朗！木風呂須の火消し「へ組」なのだが頭不在となっておる。どうか「へ組」を取りまとめてもらいたい。紅須のお組の活躍は聞いておる。戸流古町にはめ組という火消しもおるがの、いささか評判が悪い。そこで尾瀬朗には今回の火事での活躍を受けてへ組の頭に任命しようと思うのだがいかがだろう」

辰五郎 「なんだって？そいつは無茶苦茶ですぞお奉行様」

上大岡 「ええい黙れ黙れ。この火事ではめ組もお組も何もできなかったそうではないか、手負いのもの二人いたにもかかわらず「お組」だけでで消し止めたというではないか。尾瀬朗、これはお上からの命令だ。どちらの組に入る」

尾瀬朗 「そりやお奉行様の言いつけだ、へ組のお手伝いさせていただきます」

辰五郎 去る

上大岡 「それではこの伊安吾を「お組」の頭にするとということでもよろしいな」

尾瀬朗 「あちよつと待つてください。この間の火事では一番最初にここにいる勝司が現場で火消しをしてたんですよ」

勝司 「いやお恥ずかしい。火消しはからつきしなんです。ただ鼻が利くもんでどんな半鐘より先に火事を見つけたことができます。この間も…ちよつと野暮用済ませていたら…」

尾瀬朗 「お奉行様！この勝司という男をお組の頭にどうでしょう。伊安吾には纏持ちとして働いてもらいたい」

上大岡 「あいわかった、では今日のお白州はこれにて」

伊安吾去る

勝司 「伊安吾兄さん！」

江美里 「ちよつと拗ねてるだけだよ、勝つあん一人にしておいてやっておくれ」

番匠 「お奉行様、申し立てがございます」

上大岡 「そなたの意見と助力が格別に欲しいと思っていたところだ。識者である番匠殿のご意見を」

番匠 「当方も同じこと。是非お力添えを」

上大岡 「それはまたどうして」

番匠 「娘が…ああ娘が…」

上大岡 「亡くなられたのか？」

竹庵 「そうではありません」

上大岡 「てつきりやぶ医者でおなじみの竹庵殿が診察したのかと」

番匠 「いいや私にとっては死んでも同じこと」

卷司郎 「桃奈はたぶらかされたと番匠殿は言っております」

梨花 「は？何を言ってるんだい？」

竹庵 「奪われ、汚されたのです」

江麗尼 「さつき家に帰ってから急に变なことを言い出したんだよ」

番匠 「いかさま師から仕入れた妖術と魔薬のおかげで、さもなければどうしてあのような愚かな間違いをしでかしましょう」

江麗尼 「尾瀬朗さん気を悪くしないでおくれ」

竹庵 「桃奈様は分別もあり、まっとうな感覚も備えております。まじないでも掛けられぬ限り考えられませぬ」

梨花 「お前さんまで」

竹庵 「仕方ないじゃないか、兄さんがそういうんだから従うしかないだろ」

上大岡 「そのような忌まわしい手立てをもって正気を奪い、娘さんを奪った男は、心のままに極刑に処せられるがよい。たとえそれがわが子であろうとはばかるに及ばん」

番匠 「そのお言葉には心からのお礼を。わが娘桃奈をたぶらかせたのは」

竹庵 「わが兄の娘桃奈を奪ったのは」

卷司郎 「藪井家の娘桃奈を狂わせたのは」

三人 「尾瀬朗です」

皆 「なんていうことだ」

上大岡 「(尾瀬朗に) 当事者として何か言い分はおありのはずだが」

番匠 「ありますものか、申し上げた通りでございます」

尾瀬朗 「国家の枢機に預られる議官諸兄、わが尊敬と親愛の的たる御一同の前に謹んで申し上げます。私が番匠様の膝下より娘桃奈を連れ去ったというのは、紛れもない……」

番匠 「この期に及んで言い訳を申すか！」

卷司郎 「ていうか、急に本寸法のオセロのセリフをコピペしたみたいな口調が気持ち悪いぞ」

尾瀬朗 「じゃあ遠慮なく！いかにも本当っす」

竹庵 「認めちゃった」

尾瀬朗 「事実！私はその女をおのが妻としました」

番匠 「バカもでたらめも休み休み言うがいい。あれほど非の打ちどころのない娘がかほどの過ちを犯すわけがない。何か妖術を使ったのだろう」

竹庵 「葉か？最近話題のアレか？こん畜生」

上大岡 「完全明白な証拠が得られぬ以上人を罪に落とすわけにはいくまい」

江麗尼 「尾瀬朗さんお答えいただきたい。邪な手段によって私たちの娘の心をとらえ情を乱したというのはまことの話なのですか？それとも正しく求め深く互いに理解しあった上のことですか？」

尾瀬朗 「彼女をここに呼びにやっていただきたい。おとっつあんの前で本人の口から話させましょう。その話にいささかでも後ろ暗いところがありましたら、打ち首獄門、市中引き回しにでもして下せえ」

上大岡 「桃奈を呼びにやれ」

桃奈 「その必要はございません」

番匠 「桃奈」

竹庵 「ああ尾瀬朗さんゆっくりと行って言ってくれたまえ」

番匠 「妻と娘が腕によりをかけた夕食を用意しているから、もちろん食べていってくれるな」

上大岡 「ちよつと待てどうした？さっきまで怒り狂っていたのにいきなりフレンドリーに！？」

卷司郎 「回想シーンにございます」

上大岡 「なるほど」

桃奈 「尾瀬朗」

尾瀬朗 「桃奈お嬢さん夕食の準備をされてると…」

桃奈 「終わった！普段やらないぐらいてきぱきと」

尾瀬朗 「そうでしたか。しかし年ごろの娘さんが男と二人きりしていると知ったらご両親が」

桃奈 「大丈夫、お話をしているだけだから。それともやましい気持でもお持ちで？」

尾瀬朗 「いやそんなことはみじんも」

桃奈 「みじんもないの？つまんない」

尾瀬朗 「は？」

桃奈 「冗談よ、冗談も通じないつまらない男ね」

尾瀬朗 「すみません」

桃奈 「でも尾瀬朗の話してくれる、全国で火を消しまくった話面白いから大好き。今日も聞かせて」

尾瀬朗 「御自宅に招かれた際に、桃奈からわが半生の物語を語り聞かせると仰せられました。北は蝦夷、

南は琉球、西は西日暮里、東は東北沢。諸国で火消しをした話をしました」

上大岡 「西と東おかしくない？」

尾瀬朗 「もしかしたらこれが私の用いた妖術の種と申しましょうか。まだあります」

江麗尼 「桃奈、ちよつと手を貸して」

桃奈 「はい、すぐ戻ってくるから」

尾瀬朗 「桃奈はいつも熱心に聞きたがり時に家事のために席を外さねば…」

桃奈 「ただいま」

尾瀬朗 「早いな！まだセリフ言い切ってない。席を外さねばならぬことがありまして、手早くそれをかたづけてまいりますと、むさぼるように私の話に耳を傾けるといふありさま」

桃奈 「ただいま」

尾瀬朗 「時には涙しねぎらいの吐息を漏らし、あわれでならぬと申してくれました。そして…」

桃奈 「もし私のことを好きになってくれる男がいたなら」

尾瀬朗 「桃奈お嬢様も年頃故、そういう方がいるのですね」

桃奈 「ちゃんと最後まで聞いて。もし尾瀬朗の知り合いに私に思いを寄せる人がいたならこう伝えて、他に何もいらぬ、今の尾瀬朗の話にあたかも自分の話のように私に聞かせてくれればいいと。それだけで私の心は相手の思うがままになります」

尾瀬朗 「ちよつと意味が分からないんですけど」

桃奈 「バカ、豆腐の角に頭ぶつけて死んじゃえ」

尾瀬朗 「彼女に私の思いを伝えました。昔話にワクワクしてくれて彼女はあつしを憐れんでくれました。

ただそのことのみ、それがあつしの使った妖術でございます」

上大岡 「そういう話を聞かされればきつと私の娘でも心動かされるでしょう。番匠殿事態はすでに取り返しつかぬものではあるが、できる限りの善処を頼む。折れた剣でもまだしも空手に勝るといふものだ。これにて一件落着！」

番匠 「何はともあれ娘の話をお聞き願いたい。万が一今の話が真実で、誘いは半ば娘のほうからだと申すなら、この男を罵った私の頭上にいかようの天罰が下ろうと厭いませぬ。桃奈この男の話は真実か？」

桃奈 「真実です」

竹庵・卷司郎が金たらいを番匠に落とす

桃奈 「私の方から告りました」

竹庵・卷司郎が金たらいを番匠に落とす

桃奈 「尾瀬朗さんと結婚します」

竹庵・卷司郎が金たらいを番匠に落とす

番匠 「一同の前で答えてもらおう、だれの言うことを一番聞かねばならないと思うか」

桃奈 「二つの負い目が私を引き裂きます。お父様には生みの御恩、育ての御恩がございます。その二つの御恩があればこそ、おかげでお父様を敬うことができました。お父様に決まっているじゃありませんか」

番匠 「ざまあみろ！聞いたか尾瀬朗！あいつの頭に金だらいぶつけて来いこんちくしょー」

桃奈 「でもここに私の夫がおります。本当にお母様はよくお仕えになりました。その父上であるおじいさまよりお父様に、ならば同様に私にもお許しをいただきとう存じます。たとえこの尾瀬朗を主としてお仕えする

と申し上げても」

番匠 「達者に暮らすがいい。帰るぞ！」

上大岡 「教訓を述べさせてもらおうとしよう。案外それが踏み石になってやがて二人が御身の心にかなう日

が…」

江麗尼 「案外それが踏み石になってやがて二人が御身の心にかなう日が来ぬでもあるまい」

お花 「万作尽くれば悲しみも終わる。事態の最悪なるを知ればもはや悲しみはいかなる夢もはぐくみ得

ざればなり」

お寅 「過ぎ去りし禍いを歎くは新しき禍いを招く最上の方法なり」

あつの 「運命の抗しがたく我より奪わんとするとき、忍耐をもつて戴せばその害もやがては空に帰せん」

梨花 「盗まれて微笑するものは盗賊より盗む者なり」

江麗尼 「益なき悲しみに身をゆだねる者は己を盗むものなり」

女全員 「これにて一件落着」

パー子 「ハッハーかつこいいい！きやー」

口々に桃菜を迎え入れる女たち

上大岡 「それ俺のきめ台詞。ところで、め組は最近やりすぎである。まとうたばかりの華やかな晴れ着を

脱ぎ捨ててこの殺伐頑迷の蛮敵掃討に、ぜひとも乗り出していただきたい」

尾瀬朗 「え？ちよつと難しくてわかんないんだけど。桃奈わかる？」

桃奈 「わかんないわかんない」

勝司 「木風呂洲のへ組に尾瀬朗さんに来てほしかったって言ってるの」

尾瀬朗 「その後のまとうたばかりのなんちゃらかんちゃらがよくわかんないんだけど」

勝司 「ようはきれいな嫁さんもらってイチヤコラしたいところだろうけど、め組をやっつけてほしいって

言ってるの」

尾瀬朗 「なんだよ、そんなこと言うために、『まとうたばかりの華やかな晴れ着を脱ぎ捨ててこの殺伐頑

迷の蛮敵掃討にぜひとも乗り出していただきたい』とか言ってるの？」

桃奈 「シェイクスピアってそういうところあるよね」

上大岡 「これにて一件落着！」

◎二幕三場

木風呂洲屋

紋太 「伊安吾、お白州はどうだった」

伊安吾 「なんでこの俺が纏持ち？勝司の下だと？」

紋太 「勝司？あの遊郭に入り浸ってる若旦那か？」

伊安吾 「美安太夫のケツ追い回すことしかできないボンボンの馬鹿旦那さ」

紋太 「口が悪いぞ！勝司さんはそんなに有能なのか？」

伊安吾 「火消しの腕はからつきしさ。ただ鼻が利く、煙が昇り半鐘が鳴る頃には匂いを頼りに現場についている」

紋太 「尾瀬朗親分にも何か考えがあるんだろう、へつついにあたって少し落ち着けよ」

伊安吾 「すまねえ」

金がチャリンと鳴る音

伊安吾 「熱っ！炭がはじけて飛んできやがった」

紋太 「そいつはいけねえ！今冷やすもの持ってきてやるからよ」

伊安吾 「何だよ全くもう！ついてねえなあ。ん？頭が頭が痛い」

伊安吾倒れる

紋太 「ちよいと伊安吾さん大丈夫ですか」

伊安吾 「ああ、大丈夫さ。ちよつとでかけてくらあ…」

紋太 「大丈夫ですか？炭が良くないのかな？」

紅洲の皆入ってくる

梨花 「ちよつとどうしちやっただらうね」

江麗尼 「あたしにもわからないよ、急に人が変わっちゃまって」

紋太 「お帰りなさい、どうしたんですか？」

江麗尼 「さっきまであんなに桃菜の結婚に前向きだったのに急に反対しだしたのよ」

紋太 「あつしには娘がいからわかんないですけれど。男親ってのはそういうものじゃないんですかね」

梨花 「それどころの騒ぎじゃなかったのよ、なんか急に悪い人間が憑依でもしたみたい」

パー子 「ひよいって！ひよいって憑依したみたいに…ハッハー面白い」

2幕3場

暗がりの路地裏

伊安吾 「ちよつと待てよ」

辰五郎 「うるせえな、血相変えていきなりなんだよ。キムタクかよ」

伊安吾 「なあ、俺と組まねえか？」

辰五郎 「は？お前どうした頭おかしくなったか？」

伊安吾 「この俺様が勝司の下で纏持ちだとよ、やってられるか」

辰五郎 「は？勝司？あいつの下だと？尾瀬朗の頭まで頭おかしくなったか？」

伊安吾 「なあ、勝司を殺してくれねえか？」

辰五郎 「おいおい物騒だな」

伊安吾 「気に食わねえ。あいつを失脚させるにはどうしたらいい。あいつは酒に弱い、遊郭狂いのくせして酒はやらないらしい。辰五郎兄貴、今お組は木風呂洲の紋太の宿屋で祝杯をあげてるはずだ。そこに行つて勝司の野郎に酒を飲ませてくれねえか」

辰五郎 「おい待て、お前の私怨で俺を罪人にするなよ」

伊安吾 「お前桃菜のことどう思う」

辰五郎 「どう思うつて…そりゃきれいなお嬢さんだなつて」

伊安吾 「欲しくねえか？」

辰五郎 「欲しいか欲しくないかって聞かれりゃ…」

伊安吾 「欲しいだろ？考えてみるよ、なんであの桃菜が尾瀬朗なんか惚れたと思う？」

辰五郎 「それがわかれば教えてほしいもんだ」

伊安吾 「気の迷いさ、じゃなきやどう考えても釣りあわねえ」

辰五郎 「でも二人は好きあつてるんだろ？太刀打ちできねえよ」

伊安吾 「いや簡単さ。尾瀬朗の気持ちや冷めさせればいい。恋ってのは天秤だ。お互いの気持ちが同じ重さだからうまくいく。片方が空っぽになっちまえば天秤は釣り合わなくなる」

辰五郎 「つまり、俺が勝司に酒を飲ませることで尾瀬朗の気持ちが桃菜からなくなる筋書きが、お前の頭の中にはできてるんだな？」

伊安吾 「そういうことだ」

辰五郎 「わかった、今夜やってみよう」

伊安吾 「恋心ってのは面白いもんだ。誰もが恐れるめ組の辰五郎がこの俺様の一言で好きないように操れる。お楽しみはこれからだ。宴の始まりだ」

◎二幕四場

木風呂洲屋にて

美安太夫と木風呂洲の娘たちの都踊り。それを見ながら酒を酌み交わす紅洲の人たち

お寅 「本当に花魁さんてのは綺麗ねえ」

パー子 「キヤー綺麗綺麗（写真を撮りまくる）」

江麗尼 「女から見ても憧れちゃうわ」

梨花 「あたしももう少し若ければあんなの着てみたかったわ」

江美里 「ところで、藪井家の皆さんはここにいて大丈夫なんですか？番匠さん一人にして」

竹庵 「さつき桃菜が言ったとおりだなんて、我々も思ったんですよ」

薪司朗 「番匠おじさんもきつとわかってるんですよ。でも父としてすぐには受け入れられない」

江麗尼 「娘の幸せを願わない親なんていませんよ、あの人も今はへそを曲げているだけ。時間がたてばき

つとうまくいきます。そうでしよお寅さん」

お花 「でもねえ、我が息子が花魁に惚れちまつてる身としては心配でしようがないのよね」

美安太夫 「お母さま、お初にお目にかかります。美安と申します。勝司さんにはいつもご贔屓にさせていただいております」

お花 「ちよっとそんなにかしこまられても困るわよ」

美安太夫 「勝司さんの女房はんに、わちき、なりたいんぞます。来年三月十五日、年季が明けるんぞます。

そのときは眉毛落として齒に鉄漿染めて、勝司さんの傍に参りんすよって、お内儀さんにしてくんなますか？」

お花 「ちよちよ：おかみさんにしてくんなますか？はいいけど、あんなぐーたらバカ息子の所に来ても苦勞するだけですよ」

美安太夫 「勝司さん、きつとおつかさんには恥ずかしくて言えないんでしようけど、よく聞かせてくれるんですよ。いつか家業を継ぐから、家業の藍染め屋を継ぐんだって。あの人わっちのところに行くっておつかさんにお金せびってませんでしたか？」

お花 「この間のもそうだよ、一両よこせって」

美安太夫 「それ嘘ですよ。勝司さん最近全然遊びに来てくれないんです」

お花 「は？じゃあ何にあの一両使ってるんだい？博打かい？それともこんな綺麗な人放って別の女か

い？あきれた」

江美里 「まあまあ、ちゃんと話最後まで聞きましょう」

美安太夫 「隣町に久蔵さんという腕のいい染め物職人がいるんですけどね、そこで勝司さん染物修行してるんですよ。わっちの年季が明けるまでに一人前になるんだって。最近は全然遊びにも来ないで時には泊まり込みで」

お花 「そうだったのかい。そうとも知らずに…息子の事頼みますね」

美安太夫 「勝司さん、おっかさんに内緒で頑張りたいみたいなんで、知らないふりしてあげてくださいね」

お寅 「よかったわねお花さん。でも大丈夫かしら？それまで知らないふりなんてできる？」

お花 「わっちも来年の3月15日まで頑張らなくちゃいけないねえ」

勝司入ってくる

勝司 「尾瀬朗兄貴！頼まれていたものできましたよ。あ：おつかさん：なんでいるんだよ」

お花 「お寅さん！あたし用事思い出しちゃった。ここで失礼しますわね」

お寅 「えー、せっかく楽しく飲んでるのに。もっと飲みたいであります」

お花 「そしたらうちで飲みなおしましょ。いいからいいから、いくでありますよ」

お寅・お花退場

江美里 「もう大丈夫みたいですよ」

勝司 「尾瀬朗兄貴に頼まれていた手ぬぐい出来上がりました」

尾瀬朗 「おお！ちゃんとアレは入ってるか？」

勝司 「もちろんですよ。ほら！果物の「桃」の絵柄」

尾瀬朗 「おお！これなら桃菜も喜んでくれるかなあ」

あつの 「これはすごいぞ！この手ぬぐい！決して手放してはならない。肌身離さず持つていれば必ず幸せになれるだろう。桃菜にそう伝えるがよい、ぎええええええ。こんなんでしたけど」

尾瀬朗 「本当ですか？今夜二人きりになったら、この手ぬぐい桃菜に送ろうと思います。幸せになれるかあ！さあさああつのさん飲んで飲んで！うれしいなあ」

江美里 「てぬぐいかあ、なつかしいねえ」

桃菜入ってくる

桃菜 「てぬぐい？」

尾瀬朗 「ああああああ」

薪司朗 「あのね、ここに縦じまの手ぬぐいあるでしょ？これ、123、はい横縞の手ぬぐいになっちゃうっていう妖術なのね」

一同シーンとしているが桃菜とパー子だけ大爆笑

桃菜

「おじさまのその妖術本当に不思議！すごくないですか？すごくないですか？」

江麗尼

「さて、そろそろあたしたちも帰りますかね。一応旦那も心配だし」

桃菜

「えー帰っちゃうの？」

梨花

「尾瀬朗さんと仲良くね」

薮井家退場

紋太

「私たちもお邪魔していいですか」

お満

「江美里さん横いいかしら」

梅、椿、桜、牡丹も横に座る

お満 「そうだ、お七ちゃんもこっちいらっしやい」

紋太 「江美里さんにはいつもお世話になりっぱなしだ」

お七も座る

お満 「最近忙しいからこの子たちだけじゃ人手が足りないって言ってたら紹介してくれて。よく働くい子よこの子。ありがとうねいい子紹介してくれて」

江美里 「私は何もしてないわよ。この間の火事でお店が燃えちゃってお七ちゃんも困ってたんだもんね。おつかさんと二人で八百屋さん切り盛りしていたけど、しばらくは紅洲にあるお寺で住まわせてもらっていたから

いいけど、お満さんに話したら住み込みで働いていいって」

お七 「頑張らせていただいています」

勝司 「与太郎飲みすぎじゃないか？」

与太郎 「いやいや全然酔っぱらってないよ。」

権助 「飲みすぎでござす」

勝司 「やめとけ！」

与太郎 「勝司さんは酒飲まないからわからないでしょうけど、酒飲みには飲まなきゃやってられないって時があるんだよ」

勝司 「どうしたって言うんだよ」

与太郎 「俺も尾瀬朗親分みたいになりたい！だから酒飲む」

権助 「どういうこととござすか？」

与太郎 「火消しの技術絶対に勝てない、だからいっぱい水分取る」

江美里 「火消しと水分関係ないじゃない」

与太郎 「火は水をかけたら消える、だから俺飲む」

勝司 「もう酔っ払ってるのか？」

与太郎 「酔ってない！俺おしっこで火を消す！」

権助 「それはむりでごわす」

与太郎 「もよおしてきた」

勝司 「だから飲みすぎなんだよ。誰かバケツもってきて」

与太郎 「そうではない、尿意だ。もれそう。もうここまで来ている」

勝司 「早くお手洗いに行きなさいよ」

与太郎 「出る出る！もうここまで尿意ドンだ」

与太郎退場

江美里 「それにしてもうちの人多く行ったんだろ」

権助 「夜も遅いから見回りのついでに探してくるでござす」

勝司 「そしたらあつしも」

与太郎 帰ってくる

与太郎 「勝司兄さんはせっかくだから太夫とイチャコラしてればいい。俺行ってくるぞ」

勝司 「随分早いな！」

与太郎 「あたしは足もおしっこも速いんだ。権助さん行こう」

権助、与太郎退場

梅 「江美里さんと伊安吾さんって恋愛結婚ですか？」

江美里 「そうだけど、それがどうしたの？」

椿 「どっちが先に惚れたんですか？」

江美里 「いいじゃないそんなの、照れ臭いわよ」

桜 「聞かせてくださいよ、私たちそういうの聞きたいお年頃なんですから」

江美里 「じゃあ交換条件！あなたたち今好きな人いるの？」

桜 「えーいません」

椿 「右に同じ」

牡丹 「右に同じ」

梅 「右に同じ」

お七 「・・・」

桃菜 「お七ちゃんいるんですか？」

お七 「火事で家が燃えてしまって、その時にお寺で寝泊まりさせていただいたんですけど、そこで修行しているお侍さんに…」

桃菜 「えー名前は知ってるの？話したことあるの？」

お七 「お手紙を…」

桃菜 「積極的〜」

江美里 「どうかしてそのお手紙をお相手に渡せないかなってお七さんから相談されてね」

お七 「そしたら伊安吾さんがそのお寺に鳶のお仕事で行くからって」

梅 「えーすごいじゃん！良かったね」

お七 「江美里さんと伊安吾さんのおかげです」

江美里 「じゃあみんな話してくれたから少しだけ話すね。伊安吾の方から贈り物をくれてね」

桃菜 「伊安吾さんからですか？」

江美里 「そう、藍染めの手ぬぐいをね」

桃菜 「素敵！」

江美里 「変な模様が描いてあってね」

桃菜 「変な模様？」

江美里 「あやし学がなかったから知らなかったんだけどね、心臓を意味する模様。南蛮ではハートってい

うんだって」

桃菜 「心臓？どういうことですか？」

江美里 「僕の心臓をあなたにとって意味だって」

桃菜 「素敵です、いいなあ私もそういうのもらいたいなあ」

江美里 「もらいたい？」

桃菜 「はい」

江美里 「尾瀬朗兄さん！そろそろ桃菜さんと部屋に戻ったら？きつとうまくいくわよ、てぬぐい」

尾瀬朗 「まじか！そしたら桃菜そろそろ部屋で休もうか」

桃菜 「はい！今夜も楽しい話聞かせてくださいね」

江美里 「頑張っ！。そろそろこの子たち家に送らなきゃならないんじゃない？」

紋太 「そうですね、今日も一日お疲れ様」

お満 「じゃあ送っていくわね」

江美里 「あたしもご一緒しますよ、勝司さんごゆっくりと」

江美里、お満、木風呂洲の女たち退場

伊安吾がお七に手招き

伊安吾 「お七、遅くなってすまなかつたな」

お七 「伊安吾さんありがとうございます」

伊安吾 「ちゃんと渡してきたぜ、愛しの吉佐さんに」

お七 「お元気でしたか？」

伊安吾 「ずっと寺の前で待ってたんだ、骨が折れるぜ。返事ももらってきたぜ」

お七 「ありがとうございます」

伊安吾 「おっと、これはただってわけにはいかないぜ」

お七 「え？」

辰五郎 「お嬢ちゃん、世の中ってのはそういう仕組みになってるんだよ」

お七 「は、はい」

伊安吾、中を改める

伊安吾 「ほらよ、早く会えるといいな」

お七 「ありがとうございます！おやすみなさい」

お七退場

伊安吾 「もう一枚、恋に溺れている大馬鹿野郎が見つかった。これで手札はそろった。まずはあちらの大馬鹿野郎から始めようか。辰五郎兄貴、頼みますよ」

辰五郎 「邪魔するぜ」

コンビニエンスストアの入店音

辰五郎 「どういう仕組みになってるんだこの店は」

紋太 「辰五郎じゃねえか。今日はもう看板だ」

チャージ決済の音

辰五郎 「そう邪険にするなよ。一杯だけもらえないか。そちらにいる一番番頭さんにご挨拶してえんだ」

紋太 「そういうことなら、一杯だけだぞ」

紋太 「ほらよ」

辰五郎 「だから、どういう仕組みだ」

美安太夫 「そしたらわっちも帰るね」

辰五郎 「おお、これはこれは、かつつあんにはの字の美安太夫じゃないかい。また遊びに行くからよ」

勝司 「てめえ…くっ」

伊安吾 「上がらせてもらうぜ」

ハンバーガーチェーンのポテトが上がったことを知らせる音

辰五郎 「なんだよこの音」

伊安吾 「ポテトが上がらせてもらったんだよ。辰五郎兄貴、いくら女が売女だからって、惚れてる男の前でそれはないでしょ」

辰五郎 「伊安吾ちよつと面貸せや」

伊安吾 「おう」

辰五郎 「お前はどっちの味方なんだよ」

伊安吾 「心配いらねえ、言った通りやればいいんだ」

辰五郎 「あとよ、この緊迫したシーンにファミマとかマックとか小ネタ挟むんじゃねえよ」

伊安吾 「いいじゃねえか、気にすんな。勝司！いや頭。美安は太夫だ、売ってるものは買えるんだ。いちいちそんなことに嫉妬しては体がもちませんぜ、嫉妬というやつに。こいつは緑色の目をした怪物で、人の心

を餌食としそれをもてあそぶのです」

辰五郎 「お組の頭就任おめでとうございます。一杯おごらせていただけますか」

紋太 「だめだ、さっさと飲んで帰りな」

伊安吾 「こいつは酒が飲めないんだ。あんたは善意のつもりかもしれないけど、有難迷惑つてのもあるんですよ」

辰五郎 「太夫の言ってた通りだ」

勝司 「なんだと？なんて言ってたんだ」

伊安吾 「おやめなさい」

勝司 「言いやがれ」

辰五郎 「うちのかつつあんいい人なんだけど、酒が飲めないのよね。辰五郎の兄貴みたいにお酒が強い人ならもつと好きになるのになあ。夫婦になるならとったりやったり…わっちにはそんな小さな幸せはかなわないのかなあって、ほろりと涙しやがった」

勝司 「大将！一杯ください」

伊安吾 「およしなさい」

勝司 「だまってられるかっての。大将大丈夫です、一杯だけもらえますか」

紋太 「お気をつけなさいよ」

辰五郎 「さあ、頭就任を祝って。乾杯だ。いい飲みっぷりじゃねえか。大将、もう一杯もらおうか」

紋太 「帰りな」

勝司 「こっちにももう一杯だ」

紋太 「しかたねえなあ」

一升瓶を渡す

紋太 「伊安吾さんちよっと」

伊安吾 「すみません迷惑かけて」

紋太 「あの男、普段からあんなに酒癖が悪いのか？」

伊安吾 「普段はちよつと飲めば寝ちまうのに、今夜はどうしたのか」

紋太 「尾瀬朗親分はそのことを知ってるのか」

伊安吾 「おそらく知りません。今後いざ半鐘が鳴った時にあの酒癖が顔を出したら、木風呂洲でも騒ぎを

起こしかねませんね」

紋太 「そのことを親分の耳に入れておいた方がいいな。表に現れた美德のみ高く買い悪徳は見逃しているかもしれないな。正直にこのことを親分に申し上げるのが部下の務めではないか」

伊安吾 「勘弁してください。私は勝司という男が好きでして、何とかあの癖を治してやりたいと」

辰五郎現れる

勝司 「この野郎待て畜生」

紋太 「どうしたのだ」

勝司 「酒樽にぶち込むぞ」

辰五郎 「ぶち込む？上等じゃねえか」

勝司 「まだほざくかこの野郎」

紋太 「手を下ろして」

勝司 「ええい離せ離さんとくらわすぞ」

紋太 「だいぶ酔っぱらっているようだ」

勝司 「酔っぱらってるだ？」

伊安吾 「(辰五郎に耳打ち) おい行くんだ火の見やぐらに上って鐘を鳴らしてこい。いけませんお二人とも。誰か手を貸してくれ。大変だ大変だ！誰だ鐘を鳴らしたのは、やめる町中起きてしまふぞ。およしなさい取り返しのつかないことになりますぞ」

伊安吾持っていた匕首をあたかも勝司が奪うように手渡す

紋太、勝司に足を刺される

尾瀬朗 「何事だこれは」

紋太 「畜生、血が止まらぬ。死ぬほどの深手だ。ええい死ね」

尾瀬朗 「よせ、命が惜しければ」

伊安吾 「お二人ともおよしなさい」

尾瀬朗 「どうした勝司、このように我を忘れるとは」

勝司 「お許してください、私には見当もつきません」

尾瀬朗 「紋太さん！、自分の名誉を汚しせつかくの評判を乱暴狼藉者と取り換えようというのか？答えて
いただきたい」

紋太 「私は深手を受けております。伊安吾に聞いてくれ口を利くのもつらい。伊安吾はすべて知っているはず。暴力をもって襲い掛かれたときに我が身を守るのが罪になるのではない限り、何も非はござらん」

尾瀬朗 「ええい腹が立つ。誰が手を出した、いくら仲間だといっても容赦しねえぞ。伊安吾兄貴！始めたのは誰だ」

紋太 「もしお前が仲間びいきや同僚のよしみで少しでも事実を曲げて報告するようなら、仲間と思わんぞ」

お満、江美里入場

お満 「あんた」

尾瀬朗 「おかみさん！早く連れて行って治療を」

お満、江美里、紋太を連れて退場

伊安吾 「俺は勝司を罪に落とすぐらいならこの舌を切り取ってもらいてえ」

紋太 「なんだと？まだあの男をかばうのか」

伊安吾 「そうじゃねえ、事実を話せばわかってくれる。め組の辰五郎ですよ。嫌がる勝司に飲み比べを挑んできた」

尾瀬朗 「勝司さんは飲めないんだろ？」

伊安吾 「勝司さんのカチンとくること言いやがって引くに引けなくなった。飲んでるうちにまた何か言っただんでしよう。とさかに来た辰五郎に襲い掛かった。そこに紋太さんが割って入った。おれは辰五郎を捕まえようと追いかけてましたが追いつけませんでした。引き返してくると二人は一塊になって打ち合い付き合いの真っ最中。人間カツとなったなら好意を抱いてくれるものを殴りかねません。辰五郎にひどい侮辱を受けたに違いありません」

伊安吾 「紋太さん、俺嘘言ってるやないよな」

紋太 「間違いねえ」

女たち紋太を連れて退場

尾瀬朗 「勝司の罪を軽くしたいのだろう。だがお待さんに刃物向けたんだ。俺の部下にはしておけぬ」

桃菜 「どうされました」

尾瀬朗 「もう済んだ。さあ部屋に戻ろう。め組がまだうろついてるかもしれない、お組の皆と夜警を頼む。

これが火消しの生活なのだ。快い眠りもいつ争いに妨げられるかわからないのだ」

江美里 「勝司さん、あなたもけがをしたのですか？」

勝司 「どんな手当ももう無駄だ。名誉！名誉！俺は名誉をなくしてしまった」

伊安吾 「なんだい！馬鹿正直に本当に怪我したと思っただけ。名誉をなくしてねえよ。尾瀬朗親分はそんな男じゃねえ。もう一度復職をお願いします。この酔っ払いめといわれるかもしれないが、度を過ぎず杯には呪

いがかけられている。中身の酒は悪魔だ」

勝司 「だから酒なんて嫌いなんだよ」

伊安吾 「酒は悪魔といましたがいい酒はいい守り神です。酒の悪口はよしましょう。ところで勝司、わかってると思うが、俺はお前が大好きだ」

勝司 「それはよくわかった、酔っぱらったおかげでな」

伊安吾 「どうしたらいいか教えてやる。桃菜お嬢さんが今のところ親分だ」

勝司 「どういうことだ？もうすっかり酔いは覚めた、なのに意味が分からない」

伊安吾 「桃菜の言うことを尾瀬朗は全部聞き入れる。桃菜お嬢さんにすべてを打ち明ける。尾瀬朗兄貴と勝司の間にはひびが入ったかもしれねえ、そこに添え木をあてがってもらうんだ、前より深い絆になるぜ」

勝司 「明日の朝早く桃菜お嬢さんにとりなしを頼むようにしよう。それでだめなら俺の運命はここでおしまいだ」

伊安吾 「心配するな。俺は夜警に行く。今夜はひとまずゆつくりと寝ちまいな」

勝司 「すまない伊安吾兄貴」

江美里 「ねえ、あんたどうしちゃったんだい？おかしいよ」

伊安吾 「おかしい？俺から言わせりゃおかしいのはお前たちだ、俺は夜警に出る」

江美里去る。

伊安吾 「どうだい？俺の役は悪党だなんて誰が言える？俺の与えた忠告は心のこもった忠実なものだ。悪

魔が最悪の罪に人間を誘い込むときはまず、天使の姿を借りて現れるという。今の俺のようにな。勝司は必死

に桃菜に運命の回復を願うだろう。あの女は勝司のために尾瀬朗をしつこく口説くだろう。その間に俺は尾瀬

朗の耳に毒を注ぎ込んでやる。桃菜が勝司の復職をせがむのは情欲のためだと。目には目を、寝取られた恨みには寝取られた恨みだ」

一人残ったあつの起きる

あつの 「ふわーっ、眠ってしまった。ん？水晶玉が…見える。世界が緑色ににごっている。何が起きると
いうのだ」

勝司 「人殺しだ！人殺しだ」

銃声とともに倒れる勝司

美安太夫 「何かあったの？怒鳴っていたのは誰？ああかつつあん！かつつあん！」

桃菜 「何の音？」

尾瀬朗 「勝司の声か…わが忠実な男が約束を果たしたのだな」

桃菜 「どなた？尾瀬朗？」

尾瀬朗 「そうだ桃菜」

桃菜 「もうお休みになりませんか？あなた」

尾瀬朗 「今夜の祈りは済ませたか。もしもまだ神の許しを得ていない罪があれば今すぐ許しを請うがいい」

桃菜 「どうしてそのようなことを」

尾瀬朗 「心の準備を終わっていないお前を殺したくない。お前の魂まで殺したくない」

桃菜 「殺すですって？」

尾瀬朗、桃菜の首を絞める

桃菜 「お願いですあなた、どうなさろうと殺すのだけは」

尾瀬朗 「もうよさぬか売女」

桃菜 「殺すなら明日にして」

尾瀬朗 「見苦しいぞ、もがくな」

桃菜 「せめてあと半時間、一言お祈りする間でも」

尾瀬朗 「もう遅い」

江美里 「頭！頭！」

尾瀬朗 「むごい俺だがまだ慈悲の心は残っておる。いつまでもお前の苦しみを長引かせたりはせぬ」

江美里 「頭！誰か来て。ああ、桃菜ちゃん何かおっしゃって」

桃菜 「無実の罪で死ぬのよ、私」

江美里 「桃菜ちゃん！桃菜ちゃん！」

「ここまであつの水晶玉の中に移された出来事

あつの 「こんなんでましたけど…大変！みんなに知らせなきゃ」

2幕
終わり

◎三幕一場

タローラモ

「兄さん昨日は大変な騒動だったね」

ジローラモ

「ああ、町中大騒ぎだったね」

タローラモ

「木風呂洲屋の紋太が勝司に刺されたらしいね」

ジローラモ

「勝司はせっかく一番番頭になったのに、クビになったらしいよ」

タローラモ

「それにしてもこの佃島発祥の挟み囲碁は本当に面白いね」

ジローラモ

「改良してマスを8かける8にしたのがちょうどいい塩梅になったね」

タローラモ

「でもいちいち駒をとったりやったりするのが面倒だね」

ジローラモ

「白と黒が裏表になったらどうだろう」

タローラモ

「さすがだ兄さん！今度はそこを改良しよう」

ジローラモ

「今日は平和な一日だといいいね」

木風呂洲屋にて

皆集まってる

江美里 「あつのさんの水晶玉に、尾瀬朗親分が桃菜ちゃんのことを殺すのが映ったってこと？」

お花 「なんでそんなことになるの？」

あつの 「わからぬ、水晶玉にそう映った」

お寅 「何かの間違いじゃなくて？」

桃菜 「見て見て見て！昨日の夜、尾瀬朗さんからいただいたんです。超かわいくないですか？ここに桃の絵があるんです」

江美里 「桃菜さん、昨日は尾瀬朗親分、何か変わったことなかった？」

桃菜 「え？いや特に…」

お花 「ちよつと事細かに話してみてくれるかな」

桃菜 「ええ？…事細かにですか？プレイ内容的な？」

お寅 「そうじゃなくて。驚かないで聞いてね。桃菜ちゃん殺されるかもしれないの」

桃菜 「ええ？どういうことですか」

あつの 「この水晶玉に映ったのだ」

桃菜 「どこで？」

卑弥呼様 「ここ、木風呂洲屋の寢室だ」

桃菜 「嘘？つまりこの家の中に殺人鬼がいるってわけね。やっつけられるか、殺人鬼と一緒になんていられるか！私はこの部屋から出る」

あつの 「死亡フラグじゃ」

江美里 「桃菜ちゃんあんまり軽率な発言はやめて」

桃菜 「わかりました。私この戦争が終わったら、祖国に帰って尾瀬朗さんと結婚するんだ」

あつの 「死亡フラグじゃ」

お花 「落ち着いて桃菜さん」

桃菜 「くそっ、大きな鉄球が。ちょうどこの道幅と同じ大きさの鉄球が。ここは俺に任せろ先に行け。

大丈夫、このくらいの鉄球にやられるわけないだろ」

あつの 「死亡フラグじゃ」

お寅 「桃菜さん」

桃菜 「なに？台風？ちよつと畑の様子を見てくる」

お寅 「だめえええええ！落ち着いて」

桃菜 「落ち着いてなんていられませんよ。だって私、尾瀬朗さんに殺されるんですよ？やだやだやだ！

いくら美人薄命とはいえ早すぎる」

あつの 「自分で言うかね？原因がわかれば回避できるやもしれぬ」

江美里 「どうです？何か見えますか？」

卑弥呼様

「緑色の影が大きくなっている。原因はこれだ」

桃菜

「どうすればいい？」

江美里

「ひとまず皆で桃菜さんを警護しましょう」

桃菜

「お願いします」

お寅

「で？さっき言ってた尾瀬朗親分から何をもらったの？」

桃菜

「これです、桃の書いてある手ぬぐい」

お花

「あら…これ結構いい仕事してるわよ。ほら、うち元々藍染屋だったから。相当いい腕の職人の仕事よ」

の仕事よ」

江美里とお寅、
目を見つめてほほ笑む

江美里

「みんな家の事とかあるかもしれないから、順番で桃菜さんを絶対に一人にしないようにしま

しよ」

勝司入場

お花 「お前なんてことしてくれたんだ」

勝司 「桃菜お嬢さん、申し訳ねえんだけど、尾瀬朗親分に口きいてもらえないかな」

お花 「あんたはこの期に及んで人に頼もうとしてるのかい？自分の尻は自分で尻ぬぐいしなさいよ」

勝司 「いやそうはいつでも」

お花 「馬鹿！」

桃菜 「お寅さん、いいんですよ。わかりました。大丈夫ですよ、私もできるだけのことはしますから。

尾瀬朗さんとあなたの仲は必ず元通りにして見せます」

勝司 「かたじけない。このご恩は一生忘れません」

桃菜 「尾瀬朗さん、昨日勝司さんの事ほめてたんですよ」

勝司 「え？」

桃菜 「これ（こっそり手ぬぐいを見せる）。今は世間体を気にしているだけですよ」

勝司 「本当にすみません」

桃菜 「お花さん一緒に行きましょう。尾瀬朗さんのところ」

勝司、桃菜、お花退場

伊安吾 「皆さんお揃いで。江美里、桃菜の手ぬぐいを借りてきてほしいんだ」

江美里 「なんでそんなことを」

伊安吾 「今回の件を、うまくしりぬぐいするために必要なんだ。勝司のために」

原 「そしたら、私が桃菜ちゃんに言って借りてきますわ」

伊安吾 「いやそれではダメなんです。今回の件は残念ながら尾瀬朗親分もかなりご立腹だ。正攻法では太刀打ちできない。つまり少し荒療治が必要なんです。この件は桃菜お嬢さんにも尾瀬朗親分にも内緒で行わなくては」

あつの 「ドッキリ仕立てじゃな」

伊安吾 「さすがです話が早い、テツテレーってやつです。詳しい計画は必要があればまた追ってご説明します」

江美里 「ちよつとこつち来て、あなた何を隠しているの」

伊安吾 「何も隠してなんかいないさ。それを今すぐ借りてきてほしいんだ」

江美里 「男の人って手ぬぐいを送るのが好きね」

伊安吾 「お前も尾瀬朗親分から贈られたのか？」

江美里 「何を言ってるの？昔あなたも私にくれたじゃない」

伊安吾 「そうだったっけか？そんなことはどうでもいい。とにかく秘密でな」

江美里出ていく

◎三幕二場

寝室

桃菜 「尾瀬朗さん入っていいですか？」

尾瀬朗 「桃菜か」

勝司 「いや、やっぱり今日はやめときます」

桃菜 「ご心配なく。あなたの復職はお約束します。私はいったん友情を誓えば、とことんまで実行いたします。もう休ませません、今夜から一睡もさせません」

お花 「桃菜ちゃん、いくら新婚とはいえそんな大胆な」

桃菜 「そうではありません」

お花 「下ネタはちよつと」

桃菜 「そうじゃなくて。勝司さんの願いを聞き入れるまで、徹夜してでもいうことを聞かせます。あなたの弁護を引き受けたからには、この私は訴訟に負けるぐらいなら命もいりません」

原 「ありがとうございます」

桃菜 「オセびっぴ！」

勝司 「オセびっぴ？」

桃菜 「あらやだ恥ずかしい。普段の呼び方出ちゃった。うちの旦那！オセびっぴ！来て来て」

勝司 「お嬢さん！私はこれで」

桃菜 「お待ちになって、ここで聞いていてくださいな」

勝司 「今は心落ち着きません。失礼します」

勝司去る。追いかける桃菜とお花

伊安吾 「まずいな」

尾瀬朗 「なにが？」

伊安吾 「いえ、別に何も。だが万が一、いや私は何も知りません」

尾瀬朗 「今、桃菜と話していたのは勝司じゃなかったか？」

伊安吾 「勝司？そんなわけない、後ろめたそうに逃げる意味が分からない」

尾瀬朗 「いや、勝司だ間違いない」

桃菜とお花帰ってくる

桃菜 「オセぴっぴ、今ある方の願いをうかがってました。あなたのご不興を買って悔やんでいる方の」

尾瀬朗 「誰のことだ」

桃菜 「オセぴっぴのお組の頭勝司さんのこと。ねえねえオセぴっぴはうちのこと好き？」

尾瀬朗 「ちよ…なにを言っている」

桃菜 「ああ照れてる」

尾瀬朗 「他のものが見ておる」

伊安吾 「あっしのは気になさらず」

お花 「私も気になさらず」

桃菜 「ですって！好きって言うって」

四方八方から変装をした木風呂洲の女たち現れる

尾瀬朗 「そりゃあ…あのその、好きに決まって」

桃菜 「いやだ、いつもみたいに言っつて」

尾瀬朗 「いつもみたいにな？」

桃菜 「誰も見てないから。ね（伊安吾に向かって目を伏せるよう促す）」

伊安吾・お花。 目を伏せる

尾瀬朗 「大好きだニヤン」

木風呂洲の女たち大爆笑

桃菜 「皆さん！いつの間に」

尾瀬朗 「うわ恥ずっ」

桃菜 「ちょうどいいわ。もし私にあなたの心を動かす力があるなら、今すぐあの方と仲直りしてください」

い。皆が見ている前で約束してください」

尾瀬朗 「今はだめだ、いずれそのうちにな」

桃菜 「今夜のお食事の時？」

尾瀬朗 「いや、今夜はだめだ」

桃菜 「では明日のお昼？」

尾瀬朗 「明日の昼は…お奉行様と会食することになっている」

桃菜 「三日以内！勝司さん本当に後悔しています。勝司さんをただ呼び戻すだけのためにこんなに手間取るなんて。私いざとなったら」

尾瀬朗 「わかったわかった。いつでもこさせるがいい。お前には何一つ断れぬ」

桃菜 「おおげさね。このお願いは、歯磨けよとか風呂入れよとかはあビバノンノまた来週。ドリフ

の加藤ちゃんレベルのお願いです。あなたの愛を試そうと思ったら、もっと重大なことをお願いするわ。二人つきり・で（はあと）」

尾瀬朗 「すまんが一人にしておいてくれぬか」

桃菜 「私があなたの頼みを断るとでも？いいえ、では…あ・と・で（はあと）」

桃菜退場

桜 「尾瀬朗さん大丈夫ですか」

椿 「頭抱えちゃってるけど」

梅 「ずいぶん言いくるめられてましたもんね」

牡丹 「怒っていらっしやるの」

尾瀬朗 「やばくない？ちよーかわいくない？俺の魂は地獄に落ちてもいい。お前を愛さないようなら、この世

は混とんの闇に飲まれよう」

桜 「のろけてるー」

椿 「オセぴっぴかわいいー」

尾瀬朗 「お前たちはだめ！おせぴっぴって呼んでいいのはももぽよだけなの」

伊安吾 「なんであんなに桃菜お嬢さんは勝司に肩入れするんだろう」

尾瀬朗 「何を考えておるのだ？」

梅 「なんかめちゃくちや含み持たせてるっていうか、まるで奇怪な考えがあってそれを口にするのが

怖いみたい」

牡丹 「さつき勝司さんが去る時にこいつはまずいって言った。ねえねえ何がまずいの？」

お七 「伊安吾さん何か大事なことを隠してるみたい」

伊安吾 「いや憶測なんですけどね、間違ってるかもしれないねえんであんまり気にしないでもらいてえんだけ

ど

実は…」

木風呂呂洲の女 「実は？」

伊安吾 「(尾瀬朗に耳打ち) かくかくしかじかなんです」

梅 「全然わかんない」

椿 「大事なところはしよらないで」

お七 「なるほど」

桜 「わかったの？ かくかくしかじかで」

牡丹 「お七ちゃんとおせびっぴは理解したみたい」

オセロ奇声を上げて倒れる

伊安吾 「大変だ！ 今すぐ手当を」

木風呂洲の女たち尾瀬朗を部屋に連れていく

伊安吾 「お気をつけなさい尾瀬朗。嫉妬というやつに。こいつは緑色の目をした怪物で、人の心を餌食とし、それをもてあそぶのです」

◎三幕二場

竹庵 「まあ疲れでしょうな。お薬を出しておきましたから」

桃菜 「ありがとうございます」

江美里 「なんでよりによって竹庵先生呼ぶのよ」

伊安吾 「仕方ないだろこの辺りで呼べばすぐ来る医者なんて竹庵先生しかないんだよ。先生送りますよ」

伊安吾と竹庵退場

尾瀬朗 「はっ！ここはどこ？私は誰？」

桃菜 「オセぴっぴ！心配したんだよ」

尾瀬朗 「頭痛い」

桃菜 「あっ！そしたらこの手ぬぐいで縛ってあげる。そしたら少し良くなるかも」

尾瀬朗 「この手ぬぐいでは小さすぎる。少し休ませてくれぬか」

尾瀬朗 手ぬぐいを払い、落ちる

江美里 「桃菜さん行きましょう」

桃菜 「オセぴっぴ後でね…」

江美里 手ぬぐいを拾う

江美里 桃菜退場

木風呂呂洲の女たち 水を持ってくる

梅 「大丈夫でしたか？」

桜 「お水お持ちしました」

尾瀬朗 「すまないな」

牡丹 「お七ちゃんから聞きました」

尾瀬朗 「何をだ？」

椿 「かくかくしかじか」

尾瀬朗 震えだす

尾瀬朗 「やめろやめてくれ」

梅 「まさか勝司さんが」

桜 「桃菜さんといい仲だなんて」

牡丹 「だから勝司さんと桃菜さんが一緒の時には油断するなって」

椿 「伊安吾さんがそう言ったのよね」

お七 「はい、そういつてました。桃菜さんはお父さんを欺いて尾瀬朗さんと結婚しました。だから尾瀬朗さんを裏切ることなんてたやすいと」

梅 「でもそんな風には見えないけど」

桜 「桃菜さんオセぴっぴの事好きだと思っただけだなあ」

椿 「でもさ？お嬢様育ちだから勝司さんみたいな遊び人にコロツと行っちゃうかも」

梅 「確かに勝司さん格好いいもんね」

牡丹 「でも勝司さんには美安太夫さんがいるでしょ？」

お七 「でも桃菜さんかわいいし」

尾瀬朗 「そう、あいつは美しい。俺は少し年を取りすぎたし、あの女は離れていったんだ。俺の救いはあの女を憎むことしかない。結婚とはなんと呪わしいものだ。かわいい女を自分のものと呼びながら、その心をものにするのだ」

尾瀬朗退場

江美里 「ちょっと何してるの？はい、手ぬぐい。桃の模様が描かれた藍染めの手ぬぐいよ。桃菜さんがうっかり落としたの」

伊安吾 「よくやった。これですべてがうまくいく」

江美里 「それで間違いない？」

伊安吾 「ああ桃の模様これだ！これさえあれば」

お七 「伊安吾さん、これまたお願いできますか？」

伊安吾 「もちろん、今日は気分がいい。金はいらない」

お七 「そんな」

伊安吾 「そのかわり、かくかくしかじかだ」

お七 「わかりました」

木風呂呂洲の女 「やっぱりかくかくしかじかでわかるのね」

◎三幕四場

美安太夫 「かつつあん大丈夫かい？」

美安太夫 手ぬぐいで雨をぬぐう

伊安吾 「尾瀬朗親分見てごらんなさい。勝司のやつの手ぬぐい、あれ桃菜さんに上げたものでしたよね」

尾瀬朗 「同じような品物かもしれぬ。ましてや勝司がアレを染めたのだ。同じものを持っていてもおかしことはない」

伊安吾 「じゃあ桃菜さんに確認してごらんなさい」

尾瀬朗 「桃菜」

桃菜 「はい」

尾瀬朗 「手を見せてくれ、しめっておるな」

桃菜 「まだ若く悲しみを知らない手ですもん」

尾瀬朗 「気前よく誰にでも優しい気質らしいぞ。ここには若い淫乱な悪魔が宿っている」

桃菜 「やだ、みんな見てるのに。私の心を差し上げたのはこの手ですもん」

尾瀬朗 「鼻が出て仕方ない、手ぬぐいを貸してくれないか」

桃菜 「今は手元にありません」

尾瀬朗 「あの手ぬぐいはあつのさんも言っていただろう、肌身離さず持っておけと」

桃菜 「ごめんなさい、お部屋にはあると思うんですけど」

尾瀬朗 「なくしたのか」

桃菜 「なくしてはいません。もってくるのは簡単ですけど今は持ってません」

尾瀬朗 「今すぐもってこい」

桃菜 「今は嫌です、それより勝司さんに声かけてあげてください。約束したじゃないですか」

尾瀬朗 「手ぬぐいだ」

桃菜 「勝司さんの事を」

尾瀬朗 「よくわかった。一足先に帰る」

尾瀬朗退場

勝司 「桃菜お嬢さんすみません」

桃菜 「あんなに怒っているの初めて見た」

美安太夫 「男なんてたちまち正体を現すんですよ。男はみんな胃袋で、私たち女は食べ物です。ががつむさぼつておいて満腹になったら吐き出すの」

お花 「手ぬぐいは手に入ったの？」

江美里 「ええ、伊安吾に渡したわ」

お寅 「状況悪化してない？」

あつの 「見えるぞ」

江美里 「え？」

あつの 「江美里さん、何か隠し事をしておるの？そう映っておる」

お寅 「江美里さん？隠し事って？私たちに？」

あつの 「そうではない、心配はいらぬ。すべてうまくいく。緑色の影が大きくなっておる、その原因は…

へつついじや。ぎえええええこんなん出ましたけど」

お満 「へつつい？まさかあの？へつつい？」

3幕終わり

◎四幕一場

タローラモ

「兄さん、なんだか雲行きが怪しくなってきたね」

ジローラモ

「何を言ってるんだい？きれいなお天道様も出ていて快晴じゃないか」

タローラモ

「そうじゃないよ、尾瀬朗さんと桃菜さんのことだよ」

ジローラモ

「まあ最初から身分も年も全く釣り合わない二人だったからねえ」

タローラモ

「男心と秋の空だねえ」

ジローラモ

「それを言うなら女心じゃないのかい？」

タローラモ

「本当に変わりやすいのは男心らしいよ」

ジローラモ

「まるでこの合わせ囲碁のようだね」

タローラモ

「兄さん、それにしても佃島発祥の合わせ囲碁ってのは、面白いけれど我々イタリア人には呼びづ

らい名前だねえ」

ジローラモ 「本当だね。舌を噛み切ってしまいそうだよ」

タローラモ 「もつと呼びやすい名前を考えなきゃね」

ジローラモ 「それはとっても素晴らしいアイデアだね」

木風呂洲屋

お花 「ちよつとみんなこれ見て。お七ちゃんが置手紙して出て行っちゃった」

お七 「皆さん本当にお世話になりました。尾瀬朗親分に助けられ、一時寺に住まわせてもらったときに、吉佐さんという若いお侍さんと出会いました。吉佐さんは剣術の修行に寺に来ていました。その時二人は恋に落ちました。しかし身分の違い、決してかなわぬ恋だとわかっておりました。木風呂洲屋にお世話になり、吉佐さんは手紙のやり取りをしていました。その節は伊安吾さんには大変お世話になりました。思いは募るばかり。どうせかなわぬ恋ならばせめてもう一度姿を見たいと思っています。今夜、あのお寺に火をつけます。そうすればきっと吉佐さんはそこに現れると思います。それだけで本望です。どうぞ被害が大きくならないうちに、お組の皆さんに

消し止めていただきたく手紙を残しました。馬鹿な私をお許してください」

江美里 「大変だよ、みんなで手分けして探そう。勝司さんはここで待機して。その鼻でいの一番に駆けつけておくれ」

薪司朗 「江美里さん、呼びだと聞いて」

江美里 「よく来てくださいました。縦じまの手ぬぐいのあの妖術」

薪司朗 「あれは妖術ではなく手品と言いまして」

江美里 「なんでもいいわ。桃菜さんに教えてあげてください。あと…これを持って行ってください。寢室にいるはずですよ」

お花 「ちよつと江美里さん、やっぱり尾瀬朗さん奉行のところになんていなかったわ」

お寅 「最初からそんな予定はなかったって」

あつの 「まずいな、緑色の影が大きくなりすぎておる」

お花 「私たちに何かできることはないの？」

お寅 「あつのさんの力で何とかならないの？」

あつの 「それは無理だ、この問題は江美里さんしか解決できぬ」

江麗尼 「江美里さん、一人で抱え込んでしまっただけじゃないわ」

梨花 「何か私たちにできることはないの？」

江美里 「全ては伊安吾の仕業なんです」

お花 「え？何を言ってるの？」

江美里 「伊安吾が何かおかしくなっちゃってしまっているんです」

お満 「このへっついをここに置いてから何かがおかしいのよ」

紋太 「ああ！そういえば番匠さんも人が変わっちゃった」

あつの 「何かほかに思い出せることはないか？」

紋太 「いや特に変わったことは無いかな、火の子が飛んできて火傷したら番匠さんも伊安吾さんも急に

頭が痛いとか行って倒れたくらいかなあ」

あつの 「いやそれだろ」

お満 「このへつついの呪い？」

江美里 「確信したのは桃菜さんの手ぬぐいです。尾瀬朗さんと桃菜さんに内緒で盗んで来いって言った時に確信しました」

原 「だってあれはドッキリみたくテツテレーって。荒療治だけど勝司さんを救うためだって」

江美里 「でも事態は余計悪くなっています」

江麗尼 「手ぬぐいを盗んだの？」

江美里 「はい」

勝司手ぬぐいで汗を拭く

梨花 「ああその手ぬぐい！」

勝司 「へ？これは伊安吾兄貴が貸してくれたでやんす」

お花 「バカ！それを見て尾瀬朗親分が勘違いして怒ってたんじゃないかい」

勝司 「へ？おっかさんこれよく見てごらんよ」

お花 「ん？これ桃菜さんに送った手ぬぐいと違うじゃない」

勝司 「桃菜さんに尾瀬朗親分が送った手ぬぐいは…あつしが染めた奴だもん

見間違うわけないさ」

お花 「あの手ぬぐいお前さんが染めたのかい？」

勝司 「おっかさんに内緒だったけど、あつしが染めた。この手ぬぐいは全然別物」

お寅 「どういうことだい江美里さん」

江美里 「あの手ぬぐいは、今は桃菜さんの手にあります、伊安吾に渡したのはかつてい安期が私にくれた

手ぬぐい。伊安吾はそれに気がつかなかったんです。きっと何か悪い悪魔に取り付かれています、伊安吾も番匠さんも」

あつの 「そこまでじゃ。もう時間はない。伊安吾を見つけ出さなくては」

江美里 「お願いしますあのを探して！悪い悪魔の思う通りにさせてたまるかってんだ」

皆出ていく

パー子 「これ桃の模様のようだけど、なんか変な桃の模様だね」

江美里 「そこで縦じまが横じまです」

パー子 「キヤー面白いー」

◎四幕二場

伊安吾 「暴れるな暴れるな」

椅子にお七が縛られている

辰五郎

「お前も相当の悪だな」

伊安吾

「尾瀬朗親分、もうすぐ木風呂洲屋に誰もいなくなる。おそらく勝司と桃菜だけが残ってる」

尾瀬朗

「なぜそんなことがわかる」

伊安吾

「こいつが放火の予告をした手紙を残したんですよ」

お七違う違うと猿轡をされながら

伊安吾

「でもご安心ください。放火魔はここに拘束してますからね」

尾瀬朗

「つまりその手紙を見た紅洲の人たちは血眼でお七を探してる、勝司はいつも通り鼻を聞かせて待

機してゐるってことだな」

伊安吾 「若い二人が一つ屋根の下。やることは一つだ。尾瀬朗親分はその現場に踏み込んで証拠をつかむ。そうすれば迷いはいらなんでしょう」

尾瀬朗 「ああ迷いなく桃菜を殺そう」

伊安吾 「さあ我々は後を追います。尾瀬朗親分は先に木風呂洲屋に」

尾瀬朗 「あの淫売め覚悟しやがれ」

尾瀬朗退場

辰五郎 「ずいぶんと荒っぽいな。勝司の野郎は本当に桃菜とできてやがるのか？」

伊安吾 「そんなわけねえだろ。桃菜は尾瀬朗に首つたけど」

辰五郎 「そしたらばれちまうじゃねえか」

伊安吾 「手ぬぐいよ。伊安吾が桃菜にくれてやった手ぬぐいを勝司は持ってやがるんだ。それを見れば尾瀬朗は勝手に早とちりするに決まってる」

辰五郎 「お七、お前も恐ろしい女だな。放火はいけねえや」

伊安吾 「そんなことするわけねえだろ。俺が書かせたのよ」

辰五郎 「恐ろしい奴だなお前。そんな奴だったっけ？」

伊安吾 「嫉妬というやつだ。こいつは緑色の目をした怪物で、人の心を餌食としそれをもてあそぶんだ。もう俺自身が緑色の怪物なんだ」

辰五郎 「お前は何に嫉妬してるって言うんだ？」

伊安吾 「俺は尾瀬朗にあこがれていた、いつかあいつの背中に追いつきたいって、そのためなら命なんて惜しくなかった、なのにあいつは勝司を頭において俺を纏持ちに落としたりがった」

辰五郎 「なるほどな、すべて合点がいった。目には目を嫉妬には嫉妬ってわけだな。で俺は何をすればいい？」

伊安吾 「勝司を殺してくれ。そしてすぐに尾瀬朗の部屋に行け。尾瀬朗はきっと桃菜に馬乗りになって首を絞めてるだろう。そこを後ろから一突きだ。桃菜にしてみりや尾瀬朗に殺されかけるところを助けてもらっただ、あとは辰五郎兄貴の好きなようにすればいい」

辰五郎 「本当にお前が緑色の悪魔に見えてきたぜ」

伊安吾 「さあ行ってくれ。俺はこの娘を始末してから行く」

お七暴れる

伊安吾 「最後に何か言い残したことはあるか？」

お七 「せめて最後に吉佐さんに会わせて」

伊安吾 「そうか冥土の土産に教えてやろう。お前が描いていた手紙、あんなもの吉佐のところへ渡してなにかいねえや。返事は俺が描いたのよ。お侍さんと身分が違うんだ。返事なんてもらえないだろう。でもそ

れじゃ稼げないからよ、俺が描いてやったのよ。吉佐ならどこぞのいいところの娘さんの上で腰降って修行してるらしいぜ。真実を知らず最後にいい思いできただろ？」

お七 「鬼！悪魔！」

伊安吾 「俺をそんなものと一緒にするな、俺は緑色の怪物だ」

お七 「あの手紙私がいやいや書いたとも思ってる？放火予告。書いてるうちにぞくぞくしてきてね。あんたの計画に加担させてもらえないかい？あいつらかもみ合ってる間に本当に火をつけさせてもらえないかね。そしたら全て私の責任さ」

伊安吾 「気に入った。お前の中に見えるぜ、嫉妬に狂った緑色の怪物が」

お七 「ねえあなた伊安吾さんじゃないだろ？」

伊安吾 「勘のいい娘だな」

お七 「死ぬ前に聞かせておくれ、伊安吾さんを操ってるお前は誰だい？」

伊安吾 「名乗るほどのものじゃねえや。長五郎という野暮な渡世人よ」

木風呂洲屋

勝司 「尾瀬老親分？」

美安太夫 「勝つあん」

勝司 「なんだ太夫じゃないですか」

美安太夫 「なんだじゃないでしょ」

勝司 「おつかさんに手ぬぐいのことばれちまった」

美安太夫 「いいんじゃないかい？おつかさんほめてましたよ、いい染具合だつて」

勝司 「本当かい？」

美安太夫 「早く年季が明ける来年の三月十五日にならないかねえ」

勝司 「時がたつのなんてあつという間さ。ちよつとごたごたしちまつてるけどよ、このごたごたが片付いたらお前のところに居続けるからよ。今までの借りを返すことにするよ」

美安太夫 「うれしいねえ」

勝司 「だから今日はここまでだ」

美安太夫 「ここまで？どうして？」

勝司 「ここで鼻を利かせてなきやいけないんだ。あと、尾瀬老親分が来るのを待ってるんだ。ケリつけなきやいけないくつてな」

美安太夫 「そういうことなら許してあげる。ちよつとお手洗い借りようかしら。それからそつと帰ることにするわ」

美安太夫退場

尾瀬朗 「勝司…」

勝司 「親分！親分なんてもう呼べる身分じゃありませんが、あの日のこと本当にすみませんでした」

尾瀬朗 「あの日のこと？お前が言うあの日のこととはどの日のことだ」

勝司 「え？いやここで俺が酔っ払っちまって…、紋太兄さんのこと…」

尾瀬朗 「そんなことはもうどうでもいい」

勝司 「え？本当ですか？よかった…」

尾瀬朗 「そんなことより今誰と話してた？女と話していたようだが」

勝司 「いや見つかったしまいましたか。馬鹿な女です」

尾瀬朗 「馬鹿だと？」

勝司 「馬鹿な女です…こんな俺みたいな男を愛してくれる。紅洲一馬鹿な、いや日本一馬鹿な女です」

尾瀬朗 「責任を取る気はあるのか？」

勝司 「責任？いやあ親分にはこんな時じゃなくてちゃんと伝えなきゃとは思ってたんですけどね」

勝司手ぬぐいで額をぬぐう

尾瀬朗 「その手ぬぐい…貴様…」

勝司 「ああこれですか？いやあつまらん手ぬぐいですよ」

尾瀬朗手ぬぐいを奪い取る

尾瀬朗 「許そう…いや全てなかったことにしよう」

辰五郎 「尾瀬朗親分、後は任せてください。親分は奥さんのところへ」

勝司 「め組の辰五郎じゃねえか。いま取り込み中だ出てっくれ。いやあ親分なかったことにしてくれるって、よかった」

尾瀬朗、桃菜の部屋へ

辰五郎 「ちょっと話がある。なかったことにするって意味を教えてやるよ」

勝司 「おいおいどうした？」

辰五郎 「手っ取り早くいうとだな、すまねえんだが…。お前を殺さなきゃならねえんだ」

◎四幕四場

桃菜の部屋

番匠・竹庵・薪司朗と桃菜

竹庵 「ごきげんよう親分」

尾瀬朗 「ようこそいらっしやいました」

竹庵 「いろいろと大変みたいですねえ」

桃菜 「ねえ外に勝司さんいたでしょ？許してあげてくれた？」

尾瀬朗 「もうなかったことにしてやった…」

桃菜 「本当に？よかった」

尾瀬朗 「地獄の炎に焼かれるがいい」

桃菜 「あなた？」

尾瀬朗 「正気の言葉か？」

桃菜 「怒ってらっしやるの？でもなかったことにしてくださいね。うれしい」

尾瀬朗 「俺もうれしいぞ、お前のきちがいぶりがわかってな。悪魔め」

竹庵 「今の仕打ちあまりにひどい。謝ったらどうだ泣いておられる」

尾瀬朗 「大地が女の涙ではらむのなら、一滴一滴がウソ泣きをするワニになるだろう。消え失せる」

番匠 「桃菜、行くぞ」

竹庵 「こんな従順な子なのに」

尾瀬朗 「桃菜」

桃菜 「尾瀬朗さん何？」

尾瀬朗 「ほらこの女はひっくり返りますよ。まるで合わせ囲碁のように、呼べば答えてひっくり返る。おっしゃる通り従順だ、どんな男にも言いなりになる。盛りのついた猿め」

竹庵 「これが江戸一番の伝説の男なのか？お奉行様もほめたたえた…」

番匠 「だから言ったではないか。帰るぞ…。娘はまだ若い。離縁状を書いて一刻も早く自由にしてやっ
てくれ」

番匠・竹庵退場

薪司朗 「うまくやるんだよ」

◎四幕五場

勝司 「人殺しだー」

美安太夫 「かつつあん！かつつあん！」

辰五郎 「よしそれでいい」

勝司 「よくわからねえけどこれでいいのか？」

美安太夫 「こんなことするより力づくで尾瀬老親分を止めたほうが早いんじゃないのかい？」

辰五郎 「駄目か…出てきやしねえ。今、尾瀬老親分は気が狂っちゃまってる。俺らは何をしたって無駄だ。ひとまずみんなを探してきちゃくれねえか？俺と勝司はここで最悪の事態になったら力づくで止めるから」

美安太夫 「あい分かった。この人じゃ力不足かもしれないから、頼んだよ辰五郎親分」

勝司 「なんだと？」

美安太夫 「あたしにまた茶を引かせるんじゃないよ。このいざこざが片付いたら居続けるんだろ？男見せておくれよ」

勝司 「もし俺に何かあったら、返事しなくてもよ勝つあん元気？って声かけてくれ。そしたら地獄のふちからでも必ず帰ってきてやるからよ」

美安太夫退場

びあ

辰五郎 「愛されてやがるねえ」

勝司 「なんで悪名高いめ組の辰五郎がこんな善人ぶったこととしてやがるんだ」

辰五郎 「ひどい言われようだな。勘違いされてるけどよ、確かにめ組はがらっぱちが悪い奴らが集まって

る。でもよ？それはどこからも相手にされない連中の受け皿なんだよ。俺だってそうだ。善悪の区別はつく。今回の伊安吾のやってることは無茶苦茶だ」

勝司 「ちゃんと話してみねえとわからねえものだな。もう少し早くこうなれば、お組とめ組もうまくいったかもしれねえな」

辰五郎 「今からだって遅くねえだろう。さあ勝司、お前の鼻と俺の腕で伊安吾の火事を消しとめようじゃねえか」

勝司 「臭う！近いぞ」

辰五郎 「いいぞその調子だ」

勝司 「近い！ていうか」

辰五郎 「ていうか？」

勝司 「この建物、木風呂洲屋が燃えてやがる」

◎四幕六場

伊安吾 「さあお七ここだ」

お七 「ここって木風呂須屋じゃないかい」

伊安吾 「今生ともお別れだ。もう吉佐にも会えないんだ。未練もないだろう」

お七 「吉佐さんに会えないんじゃないか！もう未練なんて……」

伊安吾 「もしかするとよ、ここが大きな火事になればあの時みたいに吉佐が現れるかもしれないぜ」

お七 「未練なんて……大ありだよ！ばーか！気持ち悪い！何が緑色の怪物よ」

伊安吾 「てめえ」

お七 「ああでも言わなきゃあの場で殺されてたじゃないか」

伊安吾 「まあいい、あの手紙があるんだ。どこで火事が起こったってお前の仕業になるだろう。いや俺が

そうする。齡のいかないガキとこの俺が言うことを世間がどっちを信じると思う？どけ！俺が火をつける」

お七 「だれかーここに放火魔がいるよ」

木風呂須の女たち隠れている

梅 「お七ちゃん！」

伊安吾 「てめえやめろ！あぶねえ燃えちまうじゃねえか。だれか半鐘をならせ」

椿 「全部見ていたよ」

牡丹 「悪事はお見通しだよ」

桜 「お七ちゃんこっちに逃げて」

紅須の人たち登場

江美里 「何てことだい燃えてるじゃないか。まさかあんたがやったのかい」

伊安吾 「今頃、みんな煙にやられて苦しんでるさ。いや勝司と桃菜お嬢さんは一足先に楽になってるだろ
うけどな」

江美里 「まさかあんた」

伊安吾 「ああ嫉妬に狂った尾瀬郎が桃菜を殺めているだろう。勝司は辰五郎に…」

江美里 「勝司さんも中にいるのかい？」

紋太、伊安吾を取り押さえる

紋太 「てめえ」

お花 「いくらうちの鼻が利くって言っても、自分がいるところに火をつけられたら…。勝司！バカ息
子死ぬんじゃないよ」

お花、火の中に行こうとするのを止められる

江美里 「お前たち！いけるかい」

権助 「あたりまえでござす」

与太郎 「姐さん！どうすれば」

お七 「そいつ伊安吾さんじゃないんです！」

紋太 「なんだって？」

お七 「長五郎って」

江美里 「長五郎？あの博打打ちの長五郎？へっつい…まさかあのへっついが？あんたたちこの火が大きくなるようにやるんだよ」

権助 「姐さんどこ行くんだい」

江美里 「心配いらないよ、あたしの伊安吾を取り返すために行ってくる」

火事の中に入っていく江美里

◎ 4幕7場

勝司 「駄目だ火の回りが早い」

辰五郎 「あきらめるな、まだ逃げ場所は残ってる」

勝司 「そうじゃねえ中に尾瀬朗親分と桃菜さんがいるんだ！頭！開けてくれ！」

江美里 「勝司さん！大丈夫かい」

勝司 「姐さん！俺は平気だけだよ、姐さん駄目じゃないか入ってきたら」

江美里 「こいつだよ、このへっつい」

辰五郎 「このへっついがどうしたっていうんだ」

江美里 「辰五郎さんなら知ってるだろう、長五郎のへっついなんだよ」

辰五郎 「長五郎？あの長五郎かい？」

江美里 「このへっついの火の粉で火傷してから番匠さんも伊安吾もおかしくなっちゃった」

辰五郎 「ぽっくり行っちゃってなあ面白いやつだったんだよ長五郎」

勝司 「まさかこのへっついの呪い？」

江美里 「そうだとしか考えられないんだよ。だからあたしも火傷しておかしくなってやる」

勝司 「おやめよ姐さん」

江美里 「そうしなきや伊安吾も番匠さんも元にもどらないんだよ」

辰五郎 「そしたら俺がやりますよ」

江美里 「あんたみたいな腕っ節のあるやつがおかしくなったらあたしたちじゃ止められないよ。あたしが長五郎さんに憑依される、だからあなたたちでなぜ長五郎さんがそんなことするのかを聞いて。そして願いをかなえてあげて」

勝司 「わかりました、辰五郎さん力貸してくれますよね」

辰五郎 「あたりまえよ」

江美里 「さあ長五郎出ておいで。熱い、頭が頭が…」

勝司 「江美里姐さん！」

江美里 「おお辰五郎に勝司じゃねえかお組とめ組が雁首そろえて何してやがる」

勝司 「嘘だろ？江美里姐さんに憑依してる？」

辰五郎 「長五郎！死ぬ前に丁半で随分勝ったそうじゃねえか」

江美里 「話が早い！そいつに未練があって死ぬにも死に切れねえのよ」

辰五郎 「噂には聞いてるぜそんだけの大金どこに隠した？まさかケチで有名なお前が使い切ったわけでも

あるめえ」

江美里 「へつついだ、俺は生前は左官をやっていただろ？へつついの中に埋め込んだってわけよ」

勝司 「このへつついか？」

江美里 「へつついをぶっ壊してくれ、中に小判で10両入ってる、そいつを横浜にいる俺のおっかあに渡

してやって欲しいんだ、何も親孝行してやれなかったからよそこに金を残して死ぬわけには行かなかったのよ」

辰五郎 「だからってあんまりじゃねえか、真人間を悪にするなんてよ」

江美里 「そうだな、それは悪かった、お前みたいな根っからの悪者に最初から憑依すりや良かった」

勝司 「言われてますよ、この事を知れば江美里姐さんがきつと届けてくれるはずだ。だから成仏して元に戻しておくれ」

江美里 「きっちり手付かずで10枚小判を届けてくれよ。約束破ったらまた化けて出るぜ」

辰五郎 「ちよつと待て手付かずって、横浜に行くにはあごあしが必要だろうよ、そいつは自腹でやれって言うのか？そいつは都合よすぎないか？」

江美里 「仕方ねえだろ、こっちは幽霊だ、足はださねえんだ」

辰五郎 「何サゲまでつけてんだよ、わかったよ約束だ、やるぞ勝司」

勝司 「合点」

辰五郎 「本当だひいふうみい…確かに10両」

江美里 「頼んだぜ」

辰五郎 「おいこの火の中俺たちが無事に出られなきゃこの金届けられねえぜ、火を消してくれよ」

江美里 「そんなことお手の物さ（火が消える）ほらよ。じゃあ後は頼んだぜ」

江美里 倒れる

紅洲の皆入ってくる

伊安吾 「江美里大丈夫か！」

勝司 「伊安吾の兄貴！もう元に戻ったのか？」

伊安吾 「勝司！何言ってやがるんだ、辰五郎てめえうちの江美里に何しやがった」

勝司 「兄貴！後で詳しく説明するんで今は喧嘩はなしです」

江美里 「お前さん？」

伊安吾 「よかった大丈夫なのか」

江美里 「良かった元に戻ったんだね、さあ後は親分を助けてやっつくれ」

辰五郎 「ちよつとばかり何の因果かお前も尾瀬朗親分もおかしくなっちゃまったんだ、このへっついのでな。でももう大丈夫だ。開けて入ってやんな」

尾瀬朗 「お前は何者だ」

桃菜 「あなたの妻です、貞淑で忠実な妻です」

尾瀬朗 「そう誓うがいい。天使にも似たお前のことだ、悪魔も捕まえるのもためらうかもしれぬ。だから二重に罪を重ね、忠実な妻と誓うがいい」

伊安吾 「親分！何してるんですか？おやめなさい」

辰五郎 「元に戻ってないだど？」

尾瀬朗 「来るな！これは俺とこの女の問題だ。それ以上近づいてみるこの七首で人思いに行くぞ」

勝司 「おかしい火事の匂いがする」

半鐘が鳴る

江美里 「そうか…尾瀬朗親分はへっついのでおかしくなつたんじゃないんだ」

辰五郎 「だから元に戻ってないって事か」

伊安吾 「どうする…このままここにいたらみんな焼け死ぬ、だからって親分と桃菜お嬢さんを放っておけない、辰五郎どうしたらいい？」

江美里 「だらしがないねえ、いかい勝司！外に出て風向きを見てお前さんが指揮をとりな。権助、与太郎勝司さんの指示に従うんだよ。め組の頭！すまないけれどもし方が一のためのために若い衆を集めておいてくれな
いかい」

辰五郎 「合点だ！」

江美里 「尾瀬朗親分のことは私に任せておいて」

伊安吾 「俺は何をしたら」

江美里 「あんたはここにいて、私を一人にしちやいやだよ」

伊安吾 「合点だ」

皆出て行く

桃菜 「おてんとうさまがご存じです」

尾瀬朗 「ああ、おてんとうさまがご存じだ。お前が悪魔のように不実だな」

桃菜 「私の忠実を信じてください」

尾瀬朗 「お前は愛らしく美しい。かぐわしい香りがする。おかげで五感もうすぐ。お前は生まれてこなければよかったんだ」

桃菜 「ああ知らないうちにどんな罪を犯したのでしょうか」

尾瀬朗 「この純白な紙、美しい書物はその上に、淫売と書かれるために作られたのか？」

桃菜 「夫であるあなたのために体を守り、ほかの男の汚らわしい府議の指に触れさせないことが淫売でない証拠なら、私は淫売ではありません」

尾瀬朗 「なに？淫売ではないと？」

桃菜 「はい魂にかけても」

尾瀬朗 「ではこれはなんだ（手ぬぐいを見せる）」

桃菜 「そ…それは」

尾瀬朗 「今夜の祈りは済ませたか。もしもまだ神の許しを得ていない罪があれば今すぐ許しを請うがいい」

桃菜 「どうしてそのようなことを」

尾瀬朗 「心の準備を終わっていないお前を殺したくない。お前の魂まで殺したくない」

桃菜 「殺すですって？」

尾瀬朗、桃菜の首を絞める

桃菜 「お願いですあなた、どうなさろうと殺すのだけは」

尾瀬朗 「もうよさぬか売女」

桃菜 「殺すなら明日にして」

尾瀬朗 「見苦しいぞ、もがくな」

桃菜 「せめてあと半時間、一言お祈りする間でも」

尾瀬朗 「もう遅い」

尾瀬朗 「むごい俺だがまだ慈悲の心は残っておる。いつまでもお前の苦しみを長引かせたりはせぬ」

桃菜 「無実の罪で死ぬのよ、私。最後に…最後に…これを見て」

手ぬぐいを見せる

尾瀬朗 「なぜ二枚ある？」

桃菜 「これ尾瀬朗さんにもらった手ぬぐい。ここにほら！桃の絵」

尾瀬朗 「なに？じゃあ俺が持っているこの手ぬぐいは…ここに桃の絵が…」

桃菜 「貸して！ここに桃の絵が描いてある手ぬぐいがあるでしょ？一・二・三！ほら心を意味する

凶柄。ハート！伊安吾さんが江美里さんにあげた手ぬぐい」

◎ 4幕 8場

モノローグと同じ火事シーン

尾瀬朗が桃菜を抱いて出てくる

竹庵 「お嬢さん！お嬢さん」

薪司朗 「縦じまと横じま…間に合わなかったのかい？」

番匠 「桃菜、ああかわいそうな桃菜」

梨花 「何がドッキリだよ。あんたがだまして手ぬぐい盗ませたからこんなことになったんじゃないか」

江麗尼 「桃菜！桃菜！」

あつの 「御安心なさい、生きておる。皆無事じや。桃菜さん、そろそろ狸寝入りはやめて皆にその美しい姿を見せておくれ」

桃菜 「てってれー」

勝司 「大成功でやんすね」

権助 「親分」

与太郎 「生きててよかった」

4幕終わり

◎5幕

木風呂洲屋

番匠 「その節は本当に無礼なことを言ってますまなかった」

尾瀬朗 「いいんですよ幽霊に言わされてたんじゃ仕方ない」

桃菜 「超びっくりしたんですけど」

尾瀬朗 「許してあげなさいって」

桃菜 「そうじゃないの！おせびつぴ首絞めたんですけど」

尾瀬朗 「いやあの時俺はどうかしてたんだって」

番匠 「桃菜！許してあげなさい」

桃菜 「はい、ばばびつぴが言うなら許す」

伊安吾 「つまり俺があることないこと吹き込んでこんな事態になったって事か？」

お七 「ぜんぜん覚えてないの？」

伊安吾 「恥ずかしながらまったくもって」

お七 「一つ聞いてもいいですか？吉左さんの手紙あの話は本当ですか？」

伊安吾 「本当？よくわかんないけれど、本当さ」

お七 「だから…本当に届けてくれたのが本当か、本当は届けてなかったって言うのが本当かどっちなんですか」

梅 「お七ちゃん！あなたを訪ねてお客さんが来てるわよ」

お七 「ちよつと取り込み中なんです、後にしてもらっていいですか」

椿 「そんなこと言っているのかなあ？」

桜 「誰って言ってたっけお客さん」

牡丹 「たしか…吉左さんとかいうものすごく男前の人がお七ちゃんに会いたって」

お満 「じゃあ帰ってもらいます？吉左さん」

お七 「本当だったんだ！伊安吾さんありがとう！」

伊安吾 「何がなんだかわからないけどよかったじゃねえか」

鶴子 「上方で修行してきたからものすごく大きいようちの息子」

辰五郎 「さつきから三回目ですよその話」

権助 「おっかさん！卑下も自慢でござす」

鶴子 「ああそうだったね、大きい大きいって言うけど、見慣れてしまうとそれほどでも…ああ見えて半分は…勇氣ですから。この間だって火事の燃え盛る炎の中入っていくんだよ、本当に勇氣ある男に育ってくれたよ」

与太郎 「孝行糖、孝行糖！」

辰五郎 「おう与太郎さんよ、飴一つもらおうか」

与太郎 「ありがとうございます」

お寅 「辰五郎さんすまないねえ。戸留湖町でも商いできるようにしてくれたらいいじゃないか」

辰五郎 「いや何、これが本当にうまくてよ、一度食べたなら病みつきなんだよ。ほれ金受け取れって…上見

てボーっとして何してやがる」

与太郎 「商売は上見てやれっっておつかさんがいった」

お寅 「そういう意味じゃないんだよ」

勝司 「え？じゃあ年季が明けるまで待たなくていいのかい？」

お花 「お奉行様がこの度のお組の活躍に痛く感動したみたいで、美安太夫の年季を早めるように申し付けたんだって」

籠に載せられた、花嫁姿の美安太夫現れる

勝司 「太夫！」

美安太夫 「勝つあん元氣？」

勝司 「はい！」

お花 「すまなかったねえ、お前が家業ついでくれるなんて思ってもみななかったからさ、てっきり遊び歩
いてるものだと」

勝司 「これからはよ二人力あわせてやってくからよ」

美安太夫 「おつかさん、ふつつかな娘でございますが何卒御指導くださいませね」

お寅 「おとつあんに報告しなきゃね」

尾瀬朗 「みんな丸く収まってよかったじゃねえか。ところでよ伊安吾なんで俺がお前を纏持ちにしたかわ
かるか？」

伊安吾 「いや…すみませんわかんないです」

尾瀬朗 「どう考えたってお前は頭になるべき人間だ、だけどよここにいるみんな見てみるよみんないろい
ろ足りないところあるけどよ、助け合って生きてるんだ、纏を振って上から見てもろこいつらみんなすごいぜ？お
前にはもっと広い視野で見てもらいたかったんだ」

伊安吾 「それなのに俺は…」

尾瀬朗 「まあいい！お前はまだ若いんだ、俺じゃない誰かの下についてもっと修行したらいい頭になると思うぜ！さてみんな集まってくれ。ここにいるめ組の辰五郎の頭と兄弟付き合いすることになった。だからお組もへ組もめ組持ちから合わせていこうじゃねえか」

辰五郎 「今までいろいろとすまなかったな」

尾瀬朗 「へ組は俺が頭だ、勝司！俺の纏持ちしてくれるな」

勝司 「もちろんでやんす！てことはお組の頭は…伊安吾兄貴！おめでとうございます」

尾瀬朗 「そのことなんだがよ、江美里！お前お組の頭やってくれねえか」

江美里 「は？あたしがかい？」

尾瀬朗 「この間の仕切り見事だったそうじゃねえか、もちろん暫定だ。伊安吾！お前江美里の下で纏持て！江美里あと少しなんだ、こいつを一人前の頭に育ててくれねえか」

江美里 「もちろんだよ」

あつの 「見えるぞ！皆が笑っておる。お寅さんも原さんも、木風呂須の皆も笑っておる。藪井家もお組の

男たちも笑顔だ。心配いらぬ」

江美里 「さあ！みんな今日も元気にいくよ」

あわただしく普段の生活に戻っていく

タローラモ 「兄さん今日もこの町は平和だねえ」

ジローラモ 「ああさっきまでの混沌が嘘みたいだ」

タローラモ 「まるでこの佃島発祥の合わせ囲碁のようだね」

ジローラモ 「そうだこのボードゲームの名前なんだが、オセロというのはどうだろう」

タローラモ 「それはいい考えだ。佃島発祥：ツクダオリジナルのオセロだ」

ジローラモ 「きっと流行るに違いない」

タローラモ 「今日もこの町は平和だねえ」

半鐘が鳴る

江美里 「お前たち！ 出番だよ」

男たち 「へい！ 合点だ」

終わり